

乗つてからも床の横にある網にそつと載せて置いた、大時化で船が揺れる時にも破れないやうに氣を配つた。

アメリカの一月、横断鐵道、歸りの船の中、思へばく随分汝「怪物」氣苦勞をさせたものだ。

舌をペロリと出してゐる汝を見上げて巴里からはるく来た旅をしぞ思ふ。追懐なからめやは。

——そろく巴里氣分になる。あの夜はK氏に伴れられて寄席の木戸をくゞたのであつた。入ると直ぐ異様な香氣と煙草のけむりとに驚いた。それは見物席にゆくまでに休憩場があつて、ソコには無数の淑女——實は賣笑婦であらう——が圓な目に媚を堪へてうろくしてゐる、その中に男が椅子にかけたり奏樂臺のほとりに立つてゐたりしてカフェをのみ或は煙草を吹かしてゐる。「人魚の如く月下の花に漂へ

り」といふ虚子氏の俳句の氣分に似てゐる。明るい——と言つても磨硝子越に見るやうな明るさの中に、多くの男女は入り亂れて煙の中を漂ふてゐる。私達もその中を縫ふて豫め買つて置いた席に腰を下ろした。

幕が上るとびろろの幕が下りてゐる。その幕の前に乗馬服を着た美男子（男裝した女優）が白い粒の揃つた齒を見せて、笑ましげに口上を述べる、又一方にも女優（半裸身の肉づきのいゝ）が出て、乗馬服と輕口を交はす——开して幕がキリくと揚るとモウ歡樂世界、百人近い踊り子が開いたり蒼んだり、踊つたり跳ねたり、姿態の限り肉の運動の微細を盡すのである。

なかく幕が下りない、舞臺が變換する毎に場面が新しくなり踊り子の衣裝が代つてくる。唱手も亦けぼくしい衣裝をつけて花の唇から美しくい聲音を放つ。

男は二三人しか出ない。オーケストラも多いが、踊り子も多い、多い時になると



百人以上出てくる。

殊に面白かつたのは最も美しい豊満な肉體をもつた女優を選んで、ひとりづつ變つた場面を見せたことである。金を欲しがる女——は黄金を見て狂喜する、果ては金の爲めに狂ひ躍るといふ筋、嫉妬の幕には女の妬心を現はして凄惨な姿態を見せる。淫樂の巻、虚榮の巻、遊情の巻と言つたやうに場面が變つて、背景も極めて大仕掛なもので、衣装も亦すばらしいものづくめである。遊情、淫樂等は餘り體を動かさないでいゝ女優で肉體の殊にいゝのを見せる、嫉妬の巻などはダンスの殊にいゝまいのにやらせる。要するに女性の暗い半面を斯うして見せるので、アメリカの兵隊さんなんか靴を鳴らして喜ぶ。

女王を見た。多くの若い美女をいろ／＼の姿——といふより肉をあらはにして女王の寢臺となるべく、いろ／＼の姿態をしてゐるのである。肉團の寢臺の上に女王

は今し眠りより覺めやうとして曙のやうな顔色、肉體美、曲線美の極致を現はしたとも思はれる裸形、一片の巾を纏はず肉蒲團の上に體を斜に寝て、舞臺の上にセリ上るのである。色電氣がバツと女王に向けらるゝと生きた肉塊は一個の大理石像のやうになつてびろ／＼の幕の前に浮き出る——生きた彫像、生きた大理石の美人は幕正に切れんとする刹那、顔面の筋肉ほころびて、あでやかに媚笑するのである。

最後に近づく場面が又大袈裟になつてくる。二階の見物席の前が二階幅位の硝子張になつてゐる、その硝子張の兩端は階段で舞臺へつゞいてゐるのである。即ち帝劇の二階の一等席の前に硝子張の花道がついて兩方のボックスのあたりから舞臺へ梯子がかゝつてゐるのである。

小さい柄の女だつたが、素的にダンスのうまいのがるた。この座中の厭卷であらう、爪先ダンスが殊にうまかつた。この女がオーケストラに伴れて舞臺で踊ぬいた



揚句この玻璃盤上にあがつてくる。そして一人の女に薔薇の花籠を持たせて自分は踊り狂ひ乍ら見物の前をいつたり來たりする、二階だと「見物の前」だが階下に入る我々から見ると「見物の頭の上」なのである、硝子張だから足の腹を見てゐるわけだ。その女が硝子張の上で爪先ダンスをやる、踊つては花籠から薔薇を一輪づゝとつて見物席へ投げる、花を投げる毎にいゝ香ひがする、花に巴里の香水が振りかけてあると見える。兵隊さん達は我勝に此花を拾ふの光榮に浴しやうとする、女はフランス人である、兵隊さんを嬉しがらせて巴里に金を落させることを忘れない、成るべく兵隊さんの方へ花が落ちるやうに撒く。香水が匂ふ。——赤や白の花は拾ひ得た「光榮ある」兵隊さんの襟に飾られて匂ふ。見物を香水の匂ひでほうと上氣させて置いて、今度は七八十人の踊り子を繰り出す。何れも挑發的な衣装をつけてゾロリ／＼囃子に伴つて此玻璃盤上に行列をさせ

るのである。葡萄の實が房々と實つてゐる蔓を東から西へと掛け渡して女どもは踊る。我々の頭の上で大仕掛なダンスをやられるのである、一時にバツと葡萄の蔓に灯がつく、星のやうな、星の世界の天井で巴里の踊り子は無心に踊りつゞくるのである。——

ハネると、ぞろ／＼容は出るかと思へば、休憩所のあたり、木戸口のほとりに人の渦の中に人の波の中に夜の魔性は笑みつゝ漂ひつゝある。

### パンテオンの未成品

日本大使館を或る日訪ねた。旅券の裏書を頼む爲めである。受付にはフランス人がゐた。應接室へは二人ばかり日本の旅人がゐた、ひとりの



久原の某氏は伊太利の歸りとかで頻りに伊太利が物資欠乏してゐる事を話した。

ピストルを持つてゐたので、船で一二發試験的に射撃してみた。サテ伊太利からフランスに入らうとするとピストルを見つかつた、役人は此彈丸を何處で何の必要があつて撃つたのか、と訊問してなかく聞入れない。船で撃つたと答へたところでソナナ馬鹿なことがあるかと追及久しうす。ソコで領事の手紙やら何彼と身許を證據立てるものと見せたが、此が爲め思はぬ時間を費したとコボしてゐた。

大使館を出てから、ぶらく歩いてゐる間にタクシーを見つけた。巴里はタクシ―が實に少い、なかく見つからぬ、少い爲めに運轉手は横柄で行く先を聞いて氣に入らねば乗せてくれないから遣り切れぬ。

とにかくバンテオンにタクシーをつける。ロダンの作品が、日光の下、美術的な大建築を背景として聳え立つてゐる。K氏に紀念寫眞を撮つて貰ふ。

ガイドをつれて中に入る。お馴染のシヤバンヌで一ぱいだ。寫眞や三色版で見馴れたものであるが、斯ういふ色彩で光つてゐるものか、と初めて驚いた。而も大きいのに驚いた。どれもく壁畫として大きなものである。

親しくシヤバンヌの作品の前に立つてゐると、今まで感心してゐた故國の某氏何々氏の作品が次第に箔が利けてくるのを感じる。シヤバンヌの此力と此心と此色とが、日本のシヤバンヌにないのを遺憾とする。

バンテオンの作品は已に紹介され盡してゐるから何も書かぬ。又分りもしない――たゞ正面に一つの大きな彫刻が出来つゝあるのを見た。ガイドの語るところに依ると彫刻家シツカー氏がバンテオンに一代の傑作を遺すべく五年前から取りかかつてゐる、助手を多くつかつてゐるけれども「御覽の通りにこれだけしか出来てゐるまゝぬ。此の後何年かゝるか判りません」と語る。



なるほど平和の女神のやうな像が三分の一位出来てゐて、隅の方には彫刻に必要な道具やら材料やらがゴタ／＼と置いてあつた。

「戦争は濟んだのに、未だ此彫刻は出来ない——」

パンテオンに心血を注いで力作しつゝあるシツカー氏の面影は、そこらには見えなかつたけれども。——

パンテオンは切めて一日ぢつとして見てゐなければならぬところ。

## サロンの見物

R君。——

ちようどよい時に巴里に來たと思つた。オペラのシーズンではあるしサロンも開

けてゐる、たゞ残念なのはルーブル博物館などが三分の一位しか開けてゐないことであつた。美術品を破壊されることを恐れて地下室や田舎へ搬ぎ込んであるので、夫れを持出して舊態に復すといふことは並ならぬ手数を要するのだ、ところがフランスは戦場の取片付からしてをらないやうに、諸方面に恢復の手がつけてない、美術に關するものが幾らか復舊してゐるといふことは、寧ろフランス人の藝術を尊重する氣ごゝろを買つてやらねばならぬことだ。口癖にいふが、全く歐洲の心棒が捻れてゐるからね。

サロンにいつた。天井から落る明るい光線が先づ嬉しかつた。彫刻の並べてあるところを歩くと實にいゝ氣持だ、下は砂が敷いてあるから、靴で踏むのに氣持がいゝ、新鮮な感覺を先づ足から受ける。

階段を上つて畫も見た。門外漢である私には、細かな批評は出来ないが、大體だ



け君に話せると思ふ。何といつても目につくことは戦争畫の多いことである。人に依つてモット戦争畫があるとおもつたと言ふが、私はこれだけでも澤山だとおもつた。中には随分いゝ戦争畫もあつたが慨してつまらないと思つた、悲惨なことを現はさうくとして焦り切つてゐる態度がどれにも見られた。

殊に目につくのはクレマンソー氏を題材に採つたのが多いことだつた。彫刻にも繪にも氏の肖像、氏を神人化したのが多かつた。そんな作品の前には花環が飾られてゐた。

花環と言へば、傷いた兵を題材にした彫刻の前に花環が幾つもあつたことを覚えてゐる。その花環が乾いてはさく／＼になつたことも目に残つてゐる。

一つ驚いたのは日本畫が出品されることである。二三點あつたが純然たる日本畫で、私が平福百穂氏から書いて貰つた雁よりもモット／＼まづいものであつた。

毛筆で墨畫をかいたといふことがフランス人に珍らしかつたのかもしれない、雁だとか猫だとか書いて、朱でサインがしてあつた。小さなものだつたが實につまらぬものだつた。こんな作品がサロンに並べられてゐるといふ事が不思議だつた。

「これ位なら私にだつて書けますよ、モットうまいかもしれない」と同行のK氏を願みて笑つたことだ。

倫敦で關根博士と會つたが、現代の美術作家の展覽會はまづ見て見るに堪へぬといつた。「日本の文展より拙いですよ」と博士は笑殺してゐたから私は見なかつた。

サロンは流石にサロンである。いゝ、實にいゝのがある。中には随分所謂新しい試みをやつてゐるのがあるが、土臺があるからか、危げのない、しつかりした作品ばかりであつた。こゝいらが一寸違ふ處だ。

サロンの外に個人展覽會を幾つか見た。未來派の彫刻といふのを始めて見た、隨



分怪奇極るものであるが成程と佇立久しうするものがある。實を申すとあらないのもあるが然し狙つてゐるところは充分受取れる。君に見せたい、バンテオンの前に聳えてゐるロダンのあの彫刻一つだけでも見せたい。寫真で見ても駄目だ、ロダンのサインだけでも實物を見せたいよ。サインにまでロダンといふ人が浮き出てる。――

## 倫敦後記

### 女優を見るべく

五月三十日のこれを見なくちや……と綺堂老人にそゝのかされてゐたので、巴里から大あわてに狼狽して倫敦へ歸つてきた。

生稻の主人の細君（金髪の女）が経営してゐる東洋館のすぐ近くにあるリゼントパークが會場で、この日は倫敦中の男優も女優も總出でバザアのやうなことをやる。俳優の孤兒の爲めの寄附園遊會といつたやうなもので、男は女優を見るべく、女は女優から新しい流行を學ぶべく出かけるので、一年一回大變な雜鬧でせうと、



綺堂老ドコまでもそゝのかす。

されば、東洋館に同宿する水野海軍大佐、綺堂、梅雪兩老、その他何れも、前日から切符を買つて繰出すこととなる。

大阪毎日の留學生A君と用足しにいつたかへり、定刻の午後三時リゼントパークの近くに行くともウ自動車を押すなノで通れない。シチーの方からタクシーに乗らうとしても逆も見出すことが出来なかつたのからして變に思つてゐるが、こゝに來て初めて倫敦中のタクシーが此一角に集つて今しもひに押しに押し入場しようとしてゐることを知つた。——ところで問題だ、僕個人のことでは甚だ恐れ入るが實は小用が足したくなつたのだが……サテない、公園の中に入るには人の波、自動車の行列で、いつ入らうべうも見えぬ。仕方がないからA君と別れて客を送つたかへ

りのタクシーを見つけて、ホンの目と鼻との間ながら自動車で我が宿へと駈付る。何はともあれ、用事を足してサテ同志の面々は繰込んだかと聞くと、イヤ未だですといふ。ひよつこり梅雪老が現はれて綺堂老が用足しに出て未だ歸らぬので待つてゐるといふ、これどころか早く行かぬと入れぬぞと油をかけてI君と三人リゼントパークに押かける……といふ甚だ仰山だが實は臭くて弱つた。といふのは行けともく自動車の行列で、皆例のガソリンをぶツ吐いてゐるので道を歩く臭さ、鼻の痛さ、こんな苦しい思ひをして行くがものはないと心中聊かたじろいだが、イヤ人を見るところも云へぬ。ぞろ／＼男はコンバスを張り女はスカートを切つて行くわ、公園の木立の彼方には「非常な」面白いことがありさうに、ソワ／＼と行く——ので我々も臭い思ひをして近いところだが遠い苦しい思ひをして辿りつく。



サテ事だ。

入口大難關、一門入れば又一門、踊ッ子のやうなのがプログラムを買へと賣つけ  
る、人の多いのと、うるさいのと、香水の臭ひの高いのと、暑いのと、而してプロ  
グラムでも何でも高いのにと先づ面喰ふ。

三人にA君が加はつて四人、ばら／＼になつてヤツと入場、白色人種の中に黄色  
人種が四人も揃ふと目立つのはうるさいが先づ氣の強いことに於て聊か心平かだ。

「なアんだ。人間ばツかりぢやねエか」と黄色い連中の第一聲、梅雪老だつたら  
う。「べらほうな、人間を見に来たやうなもんだ」——第二聲は僕だつたらう。何に  
しても人間の多いのに驚く、その人間たるや倫敦市中で日頃お目にかゝらぬ人種で  
異様の風體をした連中ばかり。これが貴婦人といふだらう、何かな突飛な人の目に  
つく風すればいゝといふ心得で着飾つた連中ばかりだからやり切れない。七八十の

お婆さんまでがオベラグラスを目に當て、乳母車に打乗り息子と嫁とに牽かせて人  
波の中、埃の中をお練りだから——以てロンドン人士をして如何に此舉が有頂天な  
らしめたかを推して知るべし。

先づ右側から見て行かうと人ごみの中を日本式に際どく素ばしこく抜けて天幕の  
中に入る、これは男女優持寄の古物展覧會といつたやうなもので、裝飾物だとか置  
物だとか不用になつたものを並べて皆ベラボーな値段がついてゐる。中には日本製  
の扇やら團扇やらある、「こいつア考へたなア、日本でも一つ慈善にやるといゝ」と  
梅雪老がいふ。次の天幕から又次の天幕とゆくがサテつまらい、役者の寫真など法  
外な値で賣つてゐる。ボンヤリしてゐると踊ッ子——といつても可成のお婆さんが  
「チツケット〜」と何か分らぬものを賣りにくる。



いよく面倒臭くなつてチケットなるものを買つて右手の入口へゆくと、奇劇役者みたいなのが道化た風をして頻りに客を呼んでゐる。何でも競争で入場の懐中を掠めようといふのだから懸命な聲を出してゐる。切符をとられて入場すると野天に立つて道化役者が又何か分らぬことを饒舌つてゐる。天幕の中に導かれて入場すると此處は男女優入替り聲を競はすところで、一人の男優が来て一曲身振をかしく唱ひ去ると一人の女優が出て口をつほめて思はせ振な唄をうたふ、群衆は埒もなく喝采し口笛を吹くといふ騒ぎだ。

年増ながら一人の女優は毛糸で編んだジャケットを着て運動がへりといった風で来た、そのジャケットの縁の色がオリブで又なく調和が花やかだつた、それがお氣に召したのか御婦人の中に私語が聞えた。

こゝを出て正面カフェのあるところまで出ようとしたがサテ事だ。人ごみでく

で出られたものぢやない。その間に目撃したので驚いたのは白晝公然賭博をやつてゐることであつた。ブン廻しのやうな簡單な仕掛のもので女優か踊り子か知らぬが一寸様子の變つた女が親元だ。客は金を張ると勝負——そして其一割か二割を慈善會の收入にするらしい、さういふのが二三ヶ所あつた、公然賭博が出来るのが面白いのか、慾が手傳ふのか、但しは札ッぴらの切れ工合を親元の女に見せようといふのか、兎に角客が多くて押すなく、中には婦人も札張つてゐるのを見かけた。

モ一つ目に付たのはダンスで、女優が相手になつてくれるので、男連の嬉しがりやうつたならない。天幕の下の急設舞踏場でピアノ弾くと男と女と入亂れでダンスをやる、アメリカの兵隊さんなどは大得意で女優の細腰を抱へて赤い長靴をカタつかせ乍ら「いゝ氣なもんだなア」と梅雪老をして羨ましく思はせたものだ。



正面のカフェのところへ出たがモウ四人の黄色人種がつかりして了つた。左側の方を一巡して歸らうといふことになつたが埃と汁と香水と強烈な色彩の女の服と男の息とでモウ東海の遊子四人けんなりして見る勇氣もない。女優だらう、黄色い聲を張りあけて頻りに天幕の中に入るのを勸むけれども咽喉は乾くしやり切れない、命からく人の渦から遁れて場外に出だ——。

「然しい、思ひきだなア、随分金が落ちたらう」と皆同音に云つた。

「日本でも何かの時に一度やつて手踊でも見せると大入りだよ」梅雪老も乗氣らしい。

宿にかへると——けんなりした連中ばかりで「人を見についたやうなものだ」と全く人に酔うてるる面々、僕をそのかせた綺堂老も弱つてゐる。

「いや草臥れたく、人ばかりだ」と顔の埃を拭いてゐる。

とにかく人ばかりだつた——僕の頭の中にはこればかりしか残つてゐない。

## 聖ポールの午後

倫敦も、赤毛布の見るべきところは大概見て歩いた。しかし夫等の記事は多くの旅行者が書きだしたことであるから、私は書きたくはない。たゞ聖ポール寺院のある日の午後の心持を書きたい。

ウエストミンスター寺院にも二度いつた。議院も見た、立憲政治の古い歴史と史話とをもつてるる建物も隅々まで見て歩いた、どこにもくいつたが、やつぱり私の頭の中には聖ポールの禮拜堂が残つてゐる。

此寺院は倫敦藝閣の巷にある。辻の中央に聳え立つてるる大建物で眞に倫敦藝閣



の中心にあるのだ、自動車の音が喧ましく人の歩くのが忙しく、而も地下からは遠雷の轟くやうな地下鐵道の音が聞える、そんなうるさいところにある寺なのだ。

この寺へも二三度いつた、一度は寺の前で寫眞を撮つてゐると、アメリカの兵隊が来て、鳩に豆やるからソコを撮つたらいゝだらうといろ／＼の姿勢をやつてくれた。淺草の觀音様のやうに鳩がるる、豆も乞食みたいなのが賣つてゐる。巡查の姿を見るとうる／＼なるやうだ。

私はこの寺、黒ずんだ古い／＼寺の右手の入口から、そつと足音を忍んではいる、靴音が高いと天井に響いて一種の階音をなすからである。帽子をとつて、偉人名士の像を見て歩く。本の寫眞でお目にかゝつた人が多い。然し私は有名な人の像に就て説明しやうといふのではない、私が書きたいと思ふのは此寺の中の「大なる靜かさ」である。

熱鬧の巷のたゞ眞中に、こんな靜寂な天地があらうとは思ひまうけぬことであつた。ひろい／＼禮拜所の石だゝみの上を歩いて、そこいらに列んでゐるベンチに腰をかける。ベンチには一人づゝ使はれるやうに小さな蒲團のやうなものが足許に置いてある。何かと思つたら夫れは禮拜をする時に土下座の代りに膝を突くものであつた。

—頭の上には遙けくも見える圓天井、壁きらびらやかに、四圍の窓々にはモザイクの色硝子美しく、柱の高い／＼線、天井の圓い線、うつくしい建物の線條に先づ心を惹かるゝ。

祈禱の聲も聞いた、大風琴の音色も聞いた。二十何尺といふ大風琴は比ひ稀なる音色を響かせた。ひとりの僧侶の聲は大天井に反響して、隅々までも圓らかに聞えた石だゝみに針の落ちる音も聞き取れる位この建物は正直に巧に出來てゐる。



「いや、こんなことを書くのではなかった。「大なる静かさ」を語るつもりだったのだ。

心耳が澄むといふ、全く俗界と懸はなれた世界である。市中の雑音を壁で仕切つて、こゝのみは静寂の世界がつくられてゐる。倫敦市中に斯様な静寂世界があると、いふことに於て、宗教的の効果如何は別問題とするも、少くも俗界の人々の快い休息所である。異物教徒の私も、この静かな天地を欲して、この市に出た時には五分間でも！と思つて立寄つたのであつた。宗教がドウのドウのこといふよりも、しづかな天地に餓える者は、この天井の下に慕ひ寄るのである。

私ばかりぢやない、赤毛布の團體ばかりぢやない、倫敦ツ子と見受らるゝ人々が、すうつと風の如く入つて来てはベンチに腰かけて、一寸黙想しては又すうつと風の如く去つてゆくのを、よく見かけたのである。

## ダンシング事件

郵船支店の寺井君がI君と自動車で私の宿にやつて来た。I君とは初対面である。私は直ぐ其自動車に乗せて貰つて停車場へ向つた。これは巴里へ發つ前から、寺井君に倫敦の田舎を見せて貰ふ約束があつたからである。

「どこに行くのです。」と私は聞いた。

「I君がオックスホレドの學校にいつてるんですから、そこへ行きませう。静かなところですよ」と言ふ。何處でもよろしい、私は縁の野面さへ見れば満足なんだから。

私は實は眠い、寢足りなかつたのだ。實は前夜十一時頃であつたらう、私の部屋



の戸をノックするものがある。寢衣に着替かけてるたのを止して開けてみるとボーイが一人の男を伴れて立つてゐるのだ。

「まことに済みませんが、一人同宿は願へますまいか、此方は氣の毒な方です」とボーイがいふ。私の部屋は廣くてベットが二つあるからサテこそ私の處へ來たのだ。

その旅人から聞くと斯うである。神戸のある商店の人であるが、前日倫敦に着いた、その日は宿がないので停車場の待合室で夜を明かした。今日は早朝からタクシーで宿や下宿を探し歩いたけれども満員で駄目、漸くこゝに日本人が多く宿つてると聞いたのでやつて來て見ると同様満員である。

「もう十一時になりますし、疲れてへとくです。一晩だけでいゝですが宿めていたゞけますまいか」と極めて丁寧である。

私だつて倫敦へ着いた初めの夜は宿がなくて加福氏の部屋へ割込んだ苦い經驗を持つてゐる。早速承諾した。

「すぐお休みなさい」と、私は先に寢て了つた。その人は嬉しいのか、疲れ過ぎて却つて亢奮してゐるのか、なか／＼寢つかない、日本の話、旅中の氣候の話などする。一時を打つのを知つてゐるが——その御かけで汽車の中の睡さ。

二時間ばかりして漸くオックスホードに着いた。車中は加奈陀の兵士などがゐる賑やかだつた。その兵士もこゝで下車した。

馬車に乗る。馬車からして田舎めいてゐる、此町は純然なる學校町で、大學總長が行政のことまでやる、賤しい女などは總長の命令で退去せしむることが出来るのだ。町は古い、倫敦より古い町だといふ、町は静かである、チームスの上流であらう、ゆるやかな流れがあつてボートレースの觀覽船などがある、楊柳の並本がある、



線まじりの原はらがある、ボブラの並木なみぎがある。すべてが清きよらかで静しずかである。

無帽むぼうの男おとこが通とほる。背せ廣ひろを着きて帽子ぼうしを被からずに髪かみの毛けを日ひに光ひからせてゐる。

「オックスホードで帽子ぼうしを被からない男おとこを見みたら學生がくせいと思おもつていゝです」と寺井君てらゐくんがいふ。成程なるほど學生がくせいであらう、無帽むぼうの青年せいねんを多く見みかける。

カレッヂを見みてゆく。日曜にちようなので極まめてひつそりしてゐる。古ふるい鼻はなの穴あなが黒くろくなりさうに思おもはれる位くらい煤すすけてゐる。英國えいこく當年たうねんの名士めいし、志士しし、大政治家たいせいぢか、文藝家ぶんげい、

宗教家しうけうか——の殆ほとんどは此このカレッヂから生なみ出だされてゐるのだ。

「學問がくもんを賣うるのぢやない。人間にんげんを拵こらへるところだ」——全くオックスホードの自然しぜんとカレッヂは多くのいゝ人間にんげんへ拵こらへた。

カレッヂの數かずが餘あまり多いので見みて歩く間あひだに疲つかれて了しまふ。圖書館としよくわんの圓まるい屋根やねなどを寫真しやしんに撮とる。

牧師ぼくしが殉難じゆんなんの辻つじがある。そこには高たかい石いしの尖塔せんたうが建たてゝある。I君いくんは此塔このたを仰あやいで斯いかう言いつた。

「學生がくせいはバンカラで随分ずぶん惡戯いたづらをしていますよ。先日せんじつも此塔このたのテツペンへ便壺べんじゆがかゝつてゐるのです、何れなん學生がくせいがしたことことでせうが、猿さるならいざ知らず、人間にんげんがこんな高たかい尖とがつた塔たの上うへへ登のぼれやうとは誰だれも思おもひませんよ。便壺べんじゆだけに大おほさわぎで足場あしぢやを作るやうゴタ／＼して漸あやく取とり除のけたさうですがね……」

「あの十字架じゆしかへ便壺べんじゆをひツかけれのは皮肉ひにくだね、耶蘇教國やそけうこくだけに——」と寺井君てらゐくんは笑わらつた。

「學生がくせいの惡戯いたづらはひどいんです。近頃ちかごろアメリカの兵隊へいたいが見學けんがくの爲ためめ此町このちやうに入り込こんでゐるんですよ。倫敦ロンドンに置おいとくと女おんなを買かつたり賭博たばこをやつたり惡い事わるいことをするといふので、やかましい此町このちやうによこしたと見みへます。するとドウです、もう怪あやしけな女おんな



を伴れ込んでくるのです。アメリカの兵隊といふのは手をつけられませんよ。そして毎晩のやうに宿でダンシングをやつて遅くまで騒ぐのです、此事が總長の耳に入つたものだから、早速貼紙が来ました、ダンシングをやる家があるが學生はさういふ處へ立寄つてはイケないといふ意味です。さうすると其晩學生が大勢で赤ペンキを買つて、アメリカの兵隊と女が踊る家の屋根から窓から壁から、いつばいペンキを塗り立てたものです、一夜にして赤い家が出来たものです。餘り生々しい赤ペンキで、道を通る人の目を惹くので大評判です。その家はとうとう居堪らずに夜逃げをしたといふ事です、まだ／＼學生の元氣は失せませんよ」I君の話にみんな哄笑した。ダンシング事件として町中どこでも此話が今流行してゐるといふ事であつた。

それからI君の下宿にいつた。饒舌な主婦が出て茶をのませてくれた。ベチャク

チャ／＼とうるさい程しやべつてゐた。I君の寢室まで見て夫れから停車場まで歩いてゆく。

どこまでも森とした静かな町である。

「オックスホードの女は僕は好きですがね、どうです」と寺井君が言ふ。成程、さう言はれてみると倫敦の女とは又ちがつたところがある。第一着物からして白い色を多くつけてゐる、顔がおつとりしてゐる、イギリスの本當の娘さんを見るやうな氣がする、顔に生娘らしい品がある、白粉氣がなくて白い。

「何といつても娘はオックスホードです。」と寺井君は、何度も来たが、いつでも此感じを深くすると言つた。

停車場で汽車を待つ間、蜜柑を買つてしやぶる——遠くで寺の鐘が鳴る。ボブラが金色に光る、夕陽に。



# 茶を啜り乍ら

## 一 世界記者俱樂部

巴里にある世界各國の記者俱樂部は壯麗なるものである。何でも家具屋の主人の持ものなさうで家具の月賦販賣が成功して、一代の富をなした其別荘といふ。何千萬フランつひ法か費したゞけあつて宮殿と見まがふ許り宏壯で華麗だ。この建物全部をフランス政府が記者に提供してゐるので食堂も金さへ拂へば立派な御馳走が出来りし控室から何から何まで行届いてゐる。

食事の時間などは食堂満員で英、佛、米の記者が大部分を占めてゐる。青年記者の多いのが殊に活氣づける、世界中の新聞同業者がこれ程集まつたのは開闢以來のことだらうと思はれる。

日本記者だけのたまりは日本の全權のホテル、ブリストルを入るとすぐ左側の室が夫れた、坂田西班牙公使が係で毎日午後二時半に顔合せをやつてゐる。

米國の全權のホテルの前は素破らしい景氣で自動車をズラリと何列も並べたところなんぞ、どこまでも米國式である。

大西洋横斷飛行は随分騒いだがホーカー氏の行方不明になつた時など倫敦は寄ると觸ると話題になつたものだ、米國側が勝つてもたいして騒がない。米國の方は五十哩置きに水雷艇やら驅逐艇を並べた、あんな大袈裟な事をせねば飛べないのか知らと皮肉を言つた英國の新聞があるさうな。米國の新聞は新聞で五十哩毎に艇を並べても飛んで成功するものはする！とやり返したさうな。



何にしてもえらい騒ぎだった。

倫娘である新聞社を見にいつた。電動力を自家でこしらへてゐるのからして大袈裟だと或る人にいつたら、夫れはストライキが恐ろしいから自家でやるのだといつた。皮肉の観察かも知れぬが又一面から言へば穿つた處もある。

ストライキは毎日のやうだといふと大袈裟かもしれぬが、聞かされるのは毎日のやうだ。大きな圖體をした脊廣服の紳士がハイドパークの方へぞろぞろ行くと思つたら非番巡査がストライキの相談をやる爲めで四千人集つたといふ。

騎馬巡査が練歩いてゐると思つたら職を失つた兵士が不穩だつたといふ。示威運動とストライキは之から珍しくもなさうに倫敦人は思ひ構へてゐる。

## 二 女の兵隊さん

恐ろしい世の中になつて來たのが此赤毛布の眼にも見える。

男と女の戦争が始まつてきた。

兵隊あがりの失職者は驚くべき數であり戦争の爲め膨脹してゐた事業が縮少した爲めに職を失つた男の數も大變なものださうな。

女も多い、女は戦争中に男の職を奪つてゐる。運轉手、車掌、配達、内部の細かいことは知らぬが男の職業として定つてゐたものを今度の騒ぎで女は随分奪つてゐる。そして結構にやつて行く。

乗合自動車の女の車掌でも堂々たるもので五尺六寸、二十貫の私を恐縮させる



位の女はるる。

女だつてやつてゆく——なかなかオイソレと男に仕事を返すものか。  
ところで男だ。

随分うよくしてゐる。兵隊あがりには戦場で金が使へなかつたので、巴里で先づ搾られ餘りを倫敦で取られてソロソロ懐ろ寒くなる、ソコへ仕事はない……と來てゐる。

日本の會社の支店などに休戦と同時に傳手を求めて戦地から求職の交渉をするものがあつたといふ。近頃は職業はないか、モシ缺員があれば何ヶ月後でもいいから知らしてくれろ、と依頼してくる者が多いといふ。

女の兵隊さんもなか／＼多い。

男の兵隊と女の兵隊と腕を組んで歩いて上官がくると擧手の禮をしてニヤ／＼

笑つてゐるところなど一寸日本では見られぬ圖だが、聞けば女の兵隊さんは随分戦地から病氣になつて歸つたさうである。その病氣は子供を生めば直ぐ治るんださうで又戦地に送られる。——これは隠然一種の政策を行つて種の減退を防ぐのだと誠しやかに傳へる人もあつた。

それにしても講和となれば女の兵隊さんも餘つてくる譯だ。さし向き女の兵隊は女巡査か。

女巡査と言へばよく路傍で見かけるが、アレでなか／＼柔道に巧みで酔つ拂ひなどを物の美事に取つて押へるさうだ。日本人から教はつた英國人が柔道の先生だといふ。

酒は高くなり淡くなつても依然として女の酔ッ拂ひは倫敦にゐる。バアなどでレデイなるものがグイ／＼酒を呑んでゐるのも甚だ見つともよくないものだが、酔ッ



拂つて管を巻かれるに至つては迷惑千萬だ。ある夕方の如き乗合自動車の中で女の酔ッ拂ひにとツつかまつて呂律の廻らぬ英語といふものを初めて拜聴させられたが——臭かつた。洋酒は口が臭くならぬものと思つてゐたら臭かつた。

### 三 ストライキ

巡査がストライキをやるといふ噂が立つと警視總監はやるならやれと高飛車に出た。ストライキをやれば戦地から歸つた兵士が幾らでもある！と來た。なる程これには如何に偉大な體格の所有者である巡査諸公だつて一本まるつたらう。それ位兵士あがりはうよくしてゐる。どうしやうといふのだ。

カーヂフに來れば來るで鑛山労働者はわい／＼騒いでゐる。鑛山労働問題の如きは英國では古い問題だが事實は依然として新しい日本でも近頃眞剣に議せられてきたが今からして覺醒しないとカーヂフ附近に見るやうな騒ぎを繰返さなければならぬ。

日本を發つ前、内務省の天宅事務官が視察にいつた頃筑豊の炭坑を見物したが中には労働問題を眞面目に解決したいといふので先づ労働者の住宅改良、娛樂機關等に手をつけ出した向もある。日本には日本の労働者に適した解決方法があるから必ずしも英國の例を學ぶ必要はあるまいが、世界の都倫敦にゐても此種の問題には脅かされる。それ程差迫つた幾つもの問題が力強く迫つて來たのだ。

日本の資本家は鑛山そのものに對して利を求むるだけで少しも熱がない。すぐ政治運動か所謂事業熱に驅られて了ふ。鑛山家が穴の底まで入つて行つて労働者の生



活を眞底から見てもやるといふ熱と情とがない。今の如くンば他日——と不安な思ひがツイ口から出さうになるものだ。

警保局などが眞剣に研究してくれるのはよいが調査ばかりに日を暮してはいかん、識者も盛に談論を發表してゐるが資本家は之に對してケロリとしてゐる。資本家だつて物の分らぬ者ばかりではあるまいから先づ資本家を教育してやるのも解決を急ぐ一方法ではあるまいか。

巡査とし言へば日本なら力士だ。體格雄偉、正に土俵の花たる資格がある。上海香港の印度人巡査も天下の壯觀であるが泣くさうだ。毆られたり物に激したりすると泣くさうだ。倫敦の巡査諸公は泣かない、親切である。

鐵道院の豊田參事、どうした氣まぐれか詩人の集會に出かけたものだ。所謂新人の會合で各自新作を朗讀する。——その席にゐた日東の官吏豊田君甚だ丈が小さい。

日本人としても小さい方だから一閨秀詩人が見をろしたのも無理はない。

「随分お小さいのね、日本に行けば貴郎のやうな小さい方を夥しく見得るか」とか何とかやつたものだ。

豊田君は女史を見あげて言つた。「否——しかし體の大きいものが必らずしもえらいのではない、倫敦でも大きいものは巡査になるではありませんか」

國威を發揚したと本人も得意なら日本人も喜んだ。

### 白夜書狀

妻へ。

今——大正八年六月三日午後十時半だ。正確に云へば倫敦時間一時間の掛値を引



いた午後九時なので。——日本では四日の朝であるが、お前達はまだ寝てゐる事であらう。寝るに暑い位に暑い夜かもしれないが、倫敦の夜はうそ寒い。ネルの襦袢ズボンに寝衣を重ねて此手紙を書いてゐる位だ。

今夜は非常に愉快だった。明後日はモウなつかしいロンドンを去つて、西海岸のカーヂフといふ港にいつて、そこからアメリカ行の船に乗込むのである。客船が得られないので、私は大阪商船の貨物船に乗込む、しかし他に客はないさうで、十数日間の大西洋の航海は、私ひとりで楽しみ、私ひとりで淋しみ、私ひとりで讀書し私ひとりで書く事が出来るかもしれない。私は今この孤獨を慕つてゐる。もう文明國、文明の利器、文明人とやらには飽き／＼した。

一日として家郷を思はぬことはない。日本の新緑にも心は躍る、けふは大使館にゆく社員の同人からの寄せがきのハガキがあつて私の心は妙からず楽しんだ。幾度

もハガキを繰返して讀み乍ら、大使館の日の丸の旗の辻から、セルフリツヂといふデパートメントストアの通りから、夫れからマダム、タサードに近い宿の方へ、ゆる／＼歩いていつた。

別れる時に早く歸るから便りをするな、とは言つたものの、矢張り／＼の事が氣になる——然し便りを受けないのも、いやな事のない象として安心もされる。ひとり旅は、やつぱり淋しい。

酒がないので、宿からウ井スキーを少し貰つて、寶玉のやうに賞で惜しみつゝチビ／＼と呑み減らす——こんな事を思ふと、日本にゐる酒屋の拂ひに顔をしかめるやうな事は勿體ない氣がする。

こつちに來た日本人は言葉が思ふやうに通じなかつたり、不自由だつたり、生活が俄かに變つたりするので、一時神經衰弱になるさうだ。私は啞で聾なのだが、ど



うしたものが病ひもしなければ、脅迫観念にも襲はれない、況して神經衰弱をや。子供の玩具を巴里で買ったが、倫敦まで持つてかへると壊れて了つた。倫敦で手品の材料を買つたが、壊れねばよいがと思つてゐる。何しろアメリカにゆかねば何もない。英國の玩具の如きは、日本より遙かに劣つてゐて見られたものぢやない、たゞ十六七歳の子供の使ふ機械的の玩具だけは進歩してゐる。

ネル、毛布を買つた。洋服も作つた。モーニングコートで百三十圓はかりとられた。旅行服でも七十圓だ。私が着ていつた黒地の服を見て職人が笑つてゐた。今の英國はシルクハットが影を潜めたと同様、必らず黒地、必らず編上げ靴と極つてはゐないやうだ。所謂洋行先輩の話ばかりぢや戦後の歐洲は見當のつかぬ事が多い。女はよく働いてゐる。電車の車掌まで女だ、物價が高いから女もうかくしてゐられないのだ。

そろ／＼寢やう。倫敦は暗い夜といふは三四時間しかないからね、今やつと日が暮れた位だ、一寢入りしてゐると、明けかける。そろ／＼寢やう。

### さらば愛蘭

きのふの事です。「ミスター、オノ」ときた、同室の英青年が床に寢てゐる私の處へ尖つた鼻を突出して「汝は見たか」と聞く。「何を」と私が起上ると彼は「グートバイ！アイルランド」と言ひ去つた。

なるほど——圓い窓の硝子を拭いてみると島の影が煙波の間に沈み或は浮きしつがある。夕陽は落ちかゝらうとして水平線上の島影を浮かしてはゐるが波が高まる



と沈む。——私は一寸ウ井スキーを用ゐたので、ツイうとくとしてゐたので、  
 「左様なら、アイルランド」私は口のうちで言つた。私の體は船の動搖する度毎  
 にふらくした、ふらくとする毎に愛蘭の島影は圓い窓の中に浮き或は沈んだ。  
 口の裡に寝起きのねばい唾がたまつてゐた、私は夫れを吐きも得ず、此島影の船窓  
 に浮び來るのを待ち或は沈むのを見送つた。綠色のカーテンは房と共に躍つた。  
 左様なら、愛蘭よ。

私は今、大阪商船のせれべす丸でお前の領海を去らうとしつゝあるのだ。私は倫  
 敦の懐古に疲れ、雜鬧に飽き、せち辛い生活からハチキ出されるやうに巴里に飛ん  
 だ。巴里の明るい街の空氣に浸つた、シヤンゼリゼーは花ざかりだつた。いゝ姿の  
 婦人はいゝ姿の犬を伴れて歩いた。黒い喪服の美女を見た、金殿玉樓に舞踊る肉聲  
 もあらゆる色彩も古典的な現代的ないろくの物を見せつけられた。酒むしにされ

たやうな氣分の奥そこには目前の戦争の悲哀を見て泣く自分の目を見た。ボアの森  
 の森の木立の木立の奥深く二度も私はいつた。その静けさの中にも昨のランスの戦  
 場の慘害を忘れなかつた。

くらくした頭を抱へて又海を渡つて倫敦に來た。倫敦には繁瑣な儀禮が待つて  
 るた、石炭の港カーチフから貨物船に乗つて餘儀なく發ねばならぬ私は随分辛い思  
 ひをした。英國の官憲は淋しく此港を發たうといふ私にいろくの規則を強ひた。  
 むしやくしやする胸を抱いて二度も規則の爲めに倫敦と港との間を往復した。

カーチフは世界のいろくの人種が海岸に群をなしてゐた。英國にはストライキ、  
 示威運動のない日とてはないと誰か極言したがカーチフは炭坑の土地だけに多く  
 の勞働者、險しい面持をした人々が數限りなく集まつて辻々にうごめいてゐた。  
 粉炭の煤煙はカーチフの港を燻してゐる。私は船に一夜を明して翌日また陸の役人



から苛められて又船で「文字を知らぬ軍人」に調べられて夫れから漸く船が出た。船が出る時に其軍人は私の母の名を聞いてるたが字が綴れずに一字宛書いてるるところだつた、船が出ると聞くやソコ〜に逃けるやうに去つた。船が出た、船が出て波にゆられ初めてホツとした。

それから、日が暮れて夜が明けて又暮れかゝる頃、汝、アイルランドの島影を見たのであつた。

英國内政の障礙、英國の瘤、英國の内臓病——アイルランド、自由を得んと焦りつゝあるアイルランド。——

それは昨日の事である。けふは波の間に〜船は揺れ〜走つてゐる。愛蘭の島影に對して「グートバイ」と言つた英國の青年——彼は廿三歳になる露休兵で脚に負傷し胸に勳章を吊つてゐる——彼の青年は英蘭に別れると云ふ些かの感情の動き

から去らばと云つたのであらうか。けふはトランプを一人して弄んでゐる。心あつてアイルランドと叫んだのであらうか。その時、彼は私を起して室外に去つたきりであつたが。……

一九一九年六月九日、船はカーヂフを出て三百八十一哩、紐育へ二千五百六十四哩といふ海上、無線電信がヂヂと焼つくやうな音を立てる波の荒い夜。

### 大西洋の旅

六月十四日。

連日大時化也。船腹輕き爲めぐらつく事甚し。

けふ風やゝ風ぐ。食事の時大ひにしやべる。食後蓄音器をやる。松助の蝙蝠安を



聞く、松尾大夫を聞く、大西洋の波の上で、松さんの聲色を聞く、豈痛快ならずとせんや。

無線電信感ず、又、米國側の飛行機大西洋横断を企つとなり。  
樺太と同じき緯度にわが船はあり。

十五日。

ゆふべ猫があばれたね——といふとボーイ苦笑す。

船員が酒に酔ひてあばれし事を指す也。貨物船にて長き航海に出で、酒を呑む以外に彼等の愛晴しとはなし、殊に機關部の面々に至つては殊更なり、南へくと暑くなるに伴れて感情はいよく荒み來る也。

十七日。

紐育近しといふに朝より荒れ初む。正午前後最も動搖はけし。風と雨、高波船を呑まんず。

物の破るゝ音、人のさわぐ聲、ギー〜と船の軋む音。  
幸ひに酔はず、酒に酔ふ。讀書。

二十一日。

朝早く紐育着の豫定なりしに、前夜よりパイロットボート分らず、無線電信にて呼べども分らず、海上をあちこちと迷ふ。而して遂に假泊。

また朝まだきよりパイロットを探がし始む。辛うじて捜し當て、港口に入る。自由の女神の巨像を仰いでドックに入る。



大阪商船の支店を訪ふ。摩天閣街に自分の小さな姿を顧みる。

井上氏に案内されてセントラルパークに到る。私の好みにて自動車を避けワザと馬車を選めるなり。

日本人倶楽部で日本飯を食ふ。S君の宿にゆく。こゝに始めて長き船旅の汐ばめる肌を洗ふ。

# 紐育記

## 摩天閣街より

石黒丈千先生

大阪驛頭の夜、自動車の中で御別れてしてから、もう幾月になりませう。「二三年勉強してくるさ」といふ御好意を無にして、今、私はかへりを急いで居ります。何れは歸朝した上で申上げますが、悠々として英國で生活してゐられない色々な事情が湧き起つたからであります。

私は一週間前に紐育に着きました。船のついたところから宿まで十哩以上ありま



す。荷物を運ぶにも大變なので、初めの日は着のみ着のままで上陸しました、翌日船にゆくと丁度赤飯を炊いたところだといふので、久方ぶりに食べました。

### 一 囚はれた船員

その翌日又船に参りますと、船員やら給仕が泣きさうな顔をしてゐるのです。どうしたのかと聞いてみると、米國へは會社の規則で下級船員は上陸を禁止するといふことでした。これはどの會社も同様ださうですが、思ふに上陸させると逃走する者が續出するので夫れを防ぐ爲めなのでせう。

「私共は百日近くの苦しい航海をつゞけて來ました、これから又三ヶ月も船旅をするのです。我慢して貨物船に乗つてゐるのは金を得るといふ事より世界見物が出來るといふ楽しみがあるからです。夫れにドウです、あの通り家は見えても上陸さ

れないぢやありませんか。夜は部屋に入られて鍵を掛けられます、今夜は船の鼠を驅除する間私どもは倉庫に入られて鍵を掛けられるのださうです。」彼等は怨みがましく申しました。彼等の目の前には紐育の市街があります、三十階、四十階、七十階からある大建築物が天空に聳え立つて、力ある挑發をしてゐます。うら若い船員等が囚人のやうな氣持になることにも同感されます。

### 二 軍國主義の鼓吹

私の宿はハドソン川が近いので、私の室の窓からハドソンの流れを見をろすことが出來ます。民本主義だとか人道主義だとか言つてゐる米國も盛んなる軍國主義の鼓吹をやつてゐます。ハドソン川には大きな軍艦やら驅逐艦がうんと浮いてゐます。夜になるとイルミネーションをやつて市の人々を招いて夜會などをやつて居ります



水の上やら陸の上で交換的に宴會があります、兵士は市中到る處優遇されて居ります、貴婦人らしいものが兵士の取持をやつて居ります。事實に於て兵隊さん萬歳の米國であります。

宿に一人の娘があります、宿泊人に一人の娘があります。宿泊してゐる娘の室は私の室から三番目です。そこへは婚約があるといふ海軍々醫が宿りに参ります、宿の娘は宿泊してゐる娘に向つて「私も軍人の友人を得たい、軍醫さんに紹介方を頼んで頂戴」とうるさく頼むさうです。軍醫は何と思つたのか軍人をとうとう紹介しなかつたので、娘の失望となり宿の主婦の激怒となり氣の毒にも宿泊してゐる娘は宿を謝絶されました。私はその娘の出でゆく姿を見て氣の毒で堪りませんでした。これなどは下らぬ例ですが、一種の軍人萬歳の米國の娘氣質を説明したものと見る事が出来ます。

宿の主婦といふのがいんごうな女で、白髪ですが昔は怪しげな商賣をやつたらしいのです。同宿のS君が金槌を貸してくれといつたら貸す代として五仙請求した女です。極端な例ですけれども拜金宗のアメリカ婦人の一面を知るよい話柄です。

### 三 殺風景な都會

紐育の建物は七十四階を最高として二十階三十階はザラにあります。雲のある日は七十四階の頂邊は雲にかくれませう。こんな高い建物を建てても地下は岩層ですからビクともしません、又建築費全部は地價の半分にも足りないといふのですから如何に土地が高いか分ります。紐育は平面的よりも立體的に發展して「世界一のいろ／＼をつくつて居るのであります。何でも器械づくめで出勤簿、書狀整理、車掌の金錢を入れるのまで、自動的な器械です。交通機關などは申すまでもありま



せん、米國へくると器械の力に驚かされます。

しかし考へてみると随分殺風景な都會です。文明の暗黒面を露骨にもつてゐる都會です。デゴマや銀行泥棒は活動寫眞のつくりごとではありません、實際に行はれつゝある犯罪です。紐育の支那町から貧民窟に伸びてゐる犯罪人の巢にはうっかり足が踏み込めないさうです。「世界一の文明」を誇つてゐる紐育は「世界一の暗黒面」を同時にもつてゐるかもしれません。世界一なら何でもよい——といったやうなアメリカ人には夫れでいゝかも知れません。

紐育の生活には全く疲れしました。都會としては世界一の不健康地でせう。日本人も多くは神経衰弱症にかゝるさうです。神経衰弱でないものはモウ神経の痲痺したるもの日本の事情に疎くなつたものだとか或る人は極言してゐましたが、其詮議は別として之れでは神経衰弱にもなりません。道を歩けば二百萬からの自動車が走つ

てゐる。歩く人は急ぎ足で肥つてゐる私などは息を切らして急がないと人波から取りのこされます。道を横切るにも目をキョロつかせないと危ない！ いやはや忙がしくて嫌になつて了ひます。摩天閣街のどの事務所にゆくのでもエレベーターで、急行、除行のエレベーターまで注意しなければならぬ、エレベーターの中に婦人がゐると帽子をとらなければならぬ、忙しい中にやり切れない面倒がある、市中の雑音は神経をいら立てて骨身を刻まれるやうです。

——さて夜ともなれば呑む、踊る、低級な見世物を見る。殺風景極まる生活です。飛脚旅行をやつてゐる私に紐育生活の眞のうま味、眞の趣味は無論分りませんが、第一印象を以てすればアメリカは嫌ひ、いやな處です。趣味も哲學もない國です。いや哲學博士はありませう、しかし一般の人は内面的生活をしないやうに見えます。こんな國がいつまでも榮えるのでせうか、このまゝで世界一の文明國と誇れるもの



なら、趣味といふものは不必要なもの、哲學なんてハドソン川へ打棄つてもいゝものと思はれます。

#### 四 痛快な教會堂

先生に聞かせたら痛快がれる一つの挿話があります。紐育の一番繁華な地價の最も高いところに古い教會堂があります。廣い墓地があります、この墓地だけでも賣れば何千萬圓になるか分りませんが、その墓地に紐育で一番古い人間の墓、子供の墓があります。金權者流は此會堂、此墓地を見のがしつこはありません。移轉の交渉、巨億の買收費、いろ／＼の誘惑があつたが、この教會堂の坊さんは斷乎として跳ねつけたさうです。黄金がダンスをやつてゐる紐育の眞只中に古い寺があつて、ゆかしい鐘が鳴る——一寸面白いではありませんか。この坊さんもゐなくなると愈々ア

メリカは駄目です。この坊さんの心持は紐育人に不思議がられるでせうがソコが尊いと思ひます。この尊さもなくなると愈々私が極評した「不快な文明國」になつて了ふでせう。

ごたくと申し上げました。禁酒令も近く斷行されます。禁酒令を全國に布くなどもアメリカ式の大きなところでせう。こんな事を思ひ切つてやるところ、お調子に乗つてやつつけるところだけは見捨てられませんか。何れ又申し上げます。御機嫌よろしく。

#### 七十四階に登る記

マッチ箱を重ねたやうな、筵棒に高い家がある。世界で一番高い建築物ださうな。



「十仙均一で儲けた後家さんが建てたのだが全部貸事務所だ。晝間だと二萬人位の人間が此建物の中に働いてゐる」といふ。さうすると若し此建物がべちやんこになれば二萬の人間が一時に押潰される譯だ。べらほうさつたらない。滅茶苦茶に高いものを建てたものだ。

この建物の中に何度も用事があつてエレベーターを昇つたり降つたりした、日本人の事務所が幾つもある。しかし一度も其てつべんを極めたことがない。

「べらほうだ」と言つてゐるより一度お上りさんになつて一番高いところまで登つて見るさ」とS君がそののかしたのはモウ明日か明後日紐育を發たうといふ頃であつた。

「登るかなア」と、私は高いく雲際に聳ゆる白い建物を見上げた。

自働食堂

先づ午めしを食つて腹を拵へてかゝらうといふので、とある地下室に繰り込む。大變な混雑だ、五六百人はゐる、客が押すなくで椅子なんか一脚だつて空いてゐるところか、立つたまゝ珈琲を呑むもの、肉を食つてゐるもの、果物をばくつてゐるもの、男女——オット女を先に言はねばならぬ、女、男、淑女、紳士、入亂れて口を動かす者姦しなんどいふも愚かだ。

料理の種類は幾百種あるだらう、一人の給仕も見當らぬ、硝子越しに料理の品が見えるから己れが好む料理の前について、示してあるだけの銀買を穴へ入るれば、自動的に蓋が開いて、料理を勝手に取出すことが出来るのだ、御菓子でも茶でも肉でもスープでも何でもある、野菜などん殊にうまい。



料理は器械で廻轉してゐるので賣れた品は忽ち補充されてゐる。客が幾ら押寄せても補充は速かだ、ホークとナイフが置いてあるから勝手に食つて勝手に置いてけば、時間を置いてボーイが汚れ物を片づけにくる。それだけで済むわけである。大演習の饗宴の時、参列した各縣の有志とやらが、「記念の爲めに」と言つて、ポケットにナイフやホークを忍ばせて去つたなどは一寸ちがつてゐる。

耳が鳴り出す

いよく昇天ときめる。

七十四階に登るには切符を求めねばならぬ、夫れからエレベーターだが、急行と除行とある、一階づゝ上つてゆくと、十階か十五階づゝ一氣に昇つてゆくとあるのだ。急行に乗る、女が動かしてゐるのだ。グイ／＼と引きあけられる。四十階

五十階——六十階と昇つてゆく早さ、上海のピークへ登るより早い、夫れと同時に耳鳴りはじまる。鼓膜の中の空氣と外との空氣の密度が刻々に違つてくるからであらう。七十階に昇ると耳はますます／＼鳴り出す。

エレベーターを下るとそこにはエハガキやら自由像の模型みたいなものや、所謂お上りさん向のものを賣つてゐる。こゝでエレベーターを又乗りかへていよ／＼でつべんへ出る。

もう多勢の「お上りさん」がゐる。怪しげな寫眞器で下界を撮つてゐるのもあれば、父子相傳漸く成つた大鐵橋を指して饒舌を揮ふ女もある。脚下には大紐育が展開して淡霧の下に活動してゐる。摩天閣は脚下にニヨキ／＼と群り立つて我々の高さに迫るべくゼンマイ仕掛で伸びてゐるやうだ、新しい市役所の高い建物が眼界近く聳えてゐる。



一種異様の音——耳鳴かとも思はれるやうな異様の響きが耳にくる。紐育の雑音が天上に消えてゆく其音なのであらう。大紐育の唸きの聲なのであらう。バナラマの生きたのを見てゐるだけで、つまらぬから下りることにする。又エレベーターでグン／＼下がる。

下界へ下ると人の忙がしい足つき、ざわ／＼として氣も心も落つかない。暑いのも暑い、暑くても白服は着てゐない、たまらぬから、そこいらへ飛び込んでアイスクリームをかちる。然り堅く練つてあるからかちるのである。

冬だつて冷たい水のみアイスクリームをかちる人種である。齒科醫が發達してゐるのも、その爲めだとも傳へられてゐる。況んや暑い日に於ておや、女も男も無暗にかちつてゐる。

いちごをぶツかけたりチョコレートを流しかけたりしてかちつてゐる。

## 禁酒の前夜

いよく／＼紐育を發たうといふ前夜であつた。西曆千九百十九年六月三十日——その日限りで、永久にアメリカは酒といふものから離れる。翌くれば七月一日、即ちアメリカ全體に亘つて禁酒令が斷行される其前夜——私だつて當分の間酒に別れを告げなければならぬから、無論酒場の扉を排して、酒を呼ぶ人の群に加はつたのである。

私が、英國を放れて、貨物船で憂き目を見乍ら、紐育についた時は、モウ禁酒運動はしてゐなかつた、已に法令となつて七月一日から嚴行されることになつてゐたからであらう。しかし、店頭などに禁酒運動の名残がないでもなかつた、私が十



仙で二つ三つ買つて来たメタルなどは最も振つたものである。小さなコップにビールが盛られて泡立つてゐる、如何にもおいしさうなガラス製のものを、三色のリボンで吊つて、メタルの表には NO BEER NO WORK (酒なくて何のおれが仕事かな)と書いてある。これは労働者が胸間にぶら下けてゐるものださうな、洒落たメタルなども當時の反對運動を思はせるものであつた。

アルコール終焉の夜

今、酒場は煙草の煙で咽せ返るやうに人がこみ合つてゐる、煙の中に浮き出てる幾つもの顔は、皆赤く頬照つてゐる。口の廻りにつくビールの泡などを忙しさに拭く人もある。立つとけに呑んでゐる人もある。

ちびりくと呑むのは誰もの習慣らしいが、立つとけに呑む人などを見ると如

何にも「アルコール終焉の夜」の感じがする。

私はS君と二人並んで、しづかにビールを傾けてゐた。この日は紐育を少し離れたコネーアイランドに遊びにいった、淺草六區とでも言ひさうな見世物のあるところで、つくづく紐育人の馬鹿さ加減に呆れて歸つたところである。アメリカには哲學も趣味もない、アメリカが今のやうに世界の文明國強國として誇り得るものならば、人類には藝術も哲學も入らない——酒の席などでは、よく憤慨したものが、今日といふ今日はつくづく厭になつた。馬鹿々々しいといふ腹立たしさで一ぱいだつた。

しかし、斯うしてアメリカ全體に禁酒令を斷行するといふ處に、又アメリカ一流の偉大なる馬鹿々々しさを認めない譯にも行かない。無遠慮な、かさつな、浮薄な國民、世界一たりたがる子供のやうな國民、うぬほれる國民。いろく々な評語を並



べて見たが、しつくり合はない、どれでもいい、みんな中つてゐるやうな気がする位、此日は不快な印象を受けたのである。——が、禁酒断行の一條に突き當つて一寸考へさせられた。

日本人俱樂部

此酒場にくるまでに、私達はかなり呑んでゐた。コネーアイランドの歸りにチヤイナタンを通つた。紐育ほど文明と文明の暗黒面とを持つてゐる街はない摩天閣街の文明に人を脅すかと思へば、デゴマ、銀行泥棒に類する犯罪の頻發に人を戦慄させる……その暗黒面の縮圖ともいふべき、支那街を通つて暗い不快な印象を受けた。それから日本人俱樂部にいつた、S君が、「いよく禁酒となれば酒が呑めないそれにモウ一二ヶ月すると同人蕪城君がやつてくる、酒がなくては暮らせない彼に、

禁酒のアメリカは辛からう」といふので、ウキスキーを頒けて貰ふべく俱樂部に寄つたのである。

ところが、モウ二三ヶ月前からも先約があつて、ウキスキーの配分が會員全體に行きわたらない、S君も辛うじて一瓶だけしか割當てられなかつた。その序に當分日本料理に私が離れるといふので夕飯を済ましたのである。S君は日本酒を呑んだ私は余り呑まなかつた、夜の酒場を覗きたいといふので——并して此酒場へ來たのである。

事件の通報器

人は絶えず出たり入つたりした。酒場の人々は忙しがつてゐた、ウキスキー、セリ、ビール、前のスタンドにはビールの泡がどろどろ流れる、それを忙しさに



拭ふのであつた。

立つて呑んでゐると、後の方でコチ／＼と音がする。通信の會社から事件や電報が着き次第知らせしてくるのだ。加入者の家々の器械が丁度相場を知らせる器械のやうに、自動的に動いて自動的に印字するのである。長い／＼紙を読んでゆくと、刻々刻々くる事件が判る、即ち一種の新聞記事を読んでゐるやうなものである。その器械のところなどへ酒のコップを持つてゆき乍ら、且つ讀んでは且つ呑む者もあつた。酒場からドアを排けると直ぐ食堂になつてゐる。そこにも多くの客があつた、私達はよく此の食堂に来て蛤を氷で冷したものや焼肉やらを賞美したのであつた。今夜も同じやうに、酒を飲んで踊り場で男と女と、女と男と、腕を組み、脊に手を伸ばし、或は腰を擁して、ぐる／＼と踊り興じてゐた。

「この連中は一週間働いてこゝに来て踊るのが唯一の楽しみさ」と、S君は苦り

切つてゐた。

### ジャパニース、サンド井ツチ

考へて見れば、短い間の旅だつたけれども、随分國々を歩いて來た、随分いろ／＼の酒を呑んで來た。

しかし日本料理と日本酒は、世界の都會のどこにもあることは一つの驚異であつた。上海、香港は藝者までゐた、疊まで敷いてある座敷があつた。新嘉坡もさうであつた。馬來半島の小さな王國にも日本座敷があつた。彼南にもあつた。倫敦にも堂々たる日本料理店がある、鰻の蒲焼まで食べられた。たゞ巴里だけがなかつた、諏訪といふ日本人の旅館があるからソコに行けば食べられるかも知れないが、夫れにしても連も倫敦のやうにはいゝものは出來まいと思はれた。



巴里は不自由と聞いたから、倫敦で牡丹餅と卷壽司を折に詰めて、ぶら／＼下けながら、フランスへ渡つたのであつた。渡る時に税關の役人が異様な手荷物に不審の問を發した、私も困つた、捻首一番一代の智意と一代の語學を搾つて「ジャバニース、サンドウキツチ」とやつつけた。役人も吹き出して通過の印をしてくれた。その一折は全權のホテルにも持込まれた。日本記者團は、とある家の六七階に室を借りてすきやき俱樂部をこしらへてゐた。日本人の夫婦者が外人の處へ奉公してゐたのを伴れて来てコックにしてあつた。すきやきはうまかつた。しかし箸は汚なかつた。割箸が不足なので一人前の箸が何十度にも使はれた、箸の先が黒くなると折つて使ふと見へて四五寸の短い箸で食べてゐる人もあつた。私は牡丹餅よりも割箸を倫敦から持つて來なかつた事を悔へた。

酒の値が刻々に

棚から棚へと並んでゐる酒の瓶が、次第に減つてゆく、酒は次第に終焉に近づきつゝあるのである。フランスの葡萄酒も伊太利の甘い酒も、イギリスの火酒も次第に消えつゝある、たゞアメリカの麥酒ばかりは泉のやうに湧き出て盡きない。私達も幾つかの杯を重ねた。ビールをコップに満しては筥のやうなものでコップの上を掠める、泡を落すのだ、酒場の男は忙しさに、しつかりなしに筥を使つてゐる。

瓶の酒の値が、時間が立つごとに騰つてくるのも讀めた、酒場に知り合ひをもつ男が來ては、瓶を持つて去る、去る毎に残りの酒は値が上つてくる。いよく酒に別れる夜である、酒の終焉は近づいた、酒の値は、ぐん／＼上つてゆく。三弗半と



貼られた札が、いつの間にか五弗半に代つてゐる。

ゆるやかなの酒の味

忙しい旅であつたが随分酒も呑んだ。印度洋を廻つて来た私達の船には、豊富な酒があつた。日本酒も四合瓶七十銭で呑めた、ウキスキーもブラック、エンドホワイドが四圓五十銭位、それ位に安い酒、安い煙草がのめた。地中海の真中でキリンビールを呑むことも出来た、櫻正宗も呑めた、いや夫れ許りぢやない、倫敦の混雑する街でも日本酒は呑めた、然し二合瓶一本一圓五十銭位とられた。日本人は故郷の酒を寶玉のやうに貴び賞した。

「西洋へいつて酔へるものぢやない、言葉が不自由と勝手を知らないから、心配して酔へるものぢやない」と先輩は言つた。しかし私にはさうでもなかつた。寒暑

を超越した三昧境には、いつでもはひることが出来た。香港の陶々仙館の三階の一室で呑んだいろのく支那酒も亦忘れぬ味をもつてゐた。とても東京の支那料理屋あたりで呑ませるやうな、いやにヒリつく酒ではなかつた、リキユウ酒みたいな芳醇なところがあつた。

南洋には日本のビールが入つてゐた。イギリス人の経営してゐるホテルの食堂に入つても日本のビールがあつた。彼南の宿屋で椰子の水を呑んだ時にも、日本のビールがあつた。しかし錫蘭島のキャンデーの山上、椰子、橄欖、菩提樹の茂りに對して涼風を喫し乍ら杯を擧げた、あのビールの味には適はなかつた。この島で醸される新しいビールであつた、新しくて濃い味があつた。

倫敦の酒場



倫敦では、東海の遊子、甚だ失望した。レストランに入つても、無暗に酒を呑むといふ譯には行かなかつた。ピカデリーあたりの相當の店では、金を客から貰つて酒屋に買ひに行くといふ風だつた。許可證のある家でないと酒を賣つてゐない、而も酒を賣るのに午前と午後と時間が定められて、夫れ以外には決して賣らない。スタウトはうまかつた。しかし淡かつた。ウキスキーもうまかつた、然し豫期した程の味はなかつた、戦争のおかけだらうと諦めはしたものゝ高いのにも驚かされた。

案内記に見、先輩に聞いたやうな安い而もおいしい酒は倫敦にはない、名物のビフテキも小さく薄くなつた。

酒場は雜鬧する。時間が来ないと戸を開けないので、時間近くなると酒場の前に人が集まつて、恰度帝劇の大入場の切符賣場のやうに人が立つ。

入口がちがつてゐても、中に入ると同じコップで同じ酒を呑む。そして入口に依つて酒の値段がちがふ。紳士の入口と労働者の入口とちがふのだ。中に入れば同じ待遇で同じ酒であるが、入口に依つて値をかへるところなど面白い。女がよく呑んでゐる。未成年者は酒場に入れないので、子供を表に待たせていて淑女が酒を呑んでゐる。日がくるとべろ／＼に酔つた女を見かけることがある。管をまく女もある。

### フランスの葡萄酒

酒はなんといつてもフランスである。

カフェ、ド、パリで呑んだ白葡萄酒の味は、今も猶香の先に残つてゐる。普通のレストランやホテルの食堂などでは、埃を被つたまゝの瓶を靜かに出すけれどもこ



この白葡萄酒は別の瓶に入れてくる。すでに古くして芳醇であるといふが看板になつてゐるのかもしれない、兎に角私の舌は生れて初めて恁麼醍醐味に觸れて歡喜に酔ふたのである。

赤い葡萄酒よりも白葡萄酒を好む。ブランデーも亦フランスの名物であるけれども、白葡萄酒の酔ひ心地に比ぶべくもない。私は割合に勝手な酒のみであつて、場所とか其時の氣分とかに依つて、酒の味も違ひ又量を異にする習慣をもつてゐる、然しフランスの白葡萄酒のみは格別であつた。場所とか氣分とか感興とかいふ事は超越して了ふほどの美味と舌さわりと酔ひ心地をもつてゐた。どんな處でも、どんな場所にも、カフェ、ド、パリで呑んだやうな白葡萄酒なら——。

蛙料理も亦うまかつた。蛙は日本でも食べてゐるし、支那でも田鶏と稱して食べてゐるが、巴里の蛙料理ほどおいしく并して酒の興を助けるものはない。蛙を揚げ

て股だけ盛られたところを見ると宛として小鳥料理である、また味も鶏と違つたうまさがあるが大體に於て似てゐる。フランスの竹刀のやうに長いパン、それと蛙、そして白葡萄酒。到底何を質に於ても初鯉の比でない。パン、蛙、白葡萄酒——かう並べてみると、舌にねばい唾液が湧く。

### ハドソンの川邊に

酔ひしれた人のないのに驚く。酒場は私達がる間に幾人の人が出入したか分らない、皆ほどくに酒を呑んで出てゆく。明日から酒に別れるといふ別離の情は誰も顔には現はさないけれども、いつもより人の多いのと、酒の代が刻々に上つてゆくのとで夫れかと知られる。

S君と表に出た。晝間の暑さに引かへて夜は冷ッこ過ぎる程であつた、まれに涼



しい風さへ吹いたるた。

酒場の二三軒をいて隣りに酒を賣る店があつた。ウ井スキー一本、七弗など、正札の出でるとこは賣切れてゐた。十弗と書いたところに二三本残つてゐるのを見たら、タバアメントもブランドデーも、キウラソーもみんな賣り切れてゐた。

ふたりお酒の話をして乍ら川邊に出た。ハドソン河は夜目にも白くしづかに流れてゐる、川向ふには電氣がいろ／＼に飾られて光つてゐる。川の上には二万噸位の軍艦や驅逐艇が幾隻も浮んでゐる、今夜も晚餐會でもやつてゐるのであらう、軍艦は電光飾をやつてゐる。人道主義とか國際聯盟とか言ひ乍ら、一方に軍國主義の鼓吹をやつてゐるのはアメリカだ。偉大なる馬鹿々々しい國はヒドイ矛盾をもつてゐる、并して平氣でゐる國民だ。紐育の女は軍人でないと夜も日も明けない、有産階級の婦人といふものは兵卒の旅囊を預つたり、見物の案内をする事に日も足らざる

有様である。——

青い芝生の上に二人は尻を下ろして、軍國主義を鼓吹すべく晚餐會をやつてゐる軍艦を見をろす。

思想問題、經濟上の話——そんな堅くるしい話題は飛んで故國の噂に移つた。新聞で見ただけであるが、私が國を離れてからも、いろ／＼の新しい社會現象の湧き起つた事を感じずにはゐられない。尻からは、ひや／＼と夜氣が傳はつた。

### 日本人のどぶろく

アメリカは今度全國に禁酒令を出したが、數年前から州に依つては禁酒してゐるところがある。華盛頓州などは三年前から禁酒してゐるが、犯罪が禁酒前の二十分の一に減つたといふ。酒の上の過といふことが皆無になつた、監獄は閑になつたと



いふ事である。併し一方には忌はしい噂がないとも限らぬ、アルコール中毒になつたものは、香水を呑んでるとか、又はモルヒネを注射して酣醉を買つてるとかそんな極端な方法で酔はふとしるる。

禁酒令發布と同時に毒の値段が高騰した。それは飲み物が不足になる結果、毒を使つた飲料水の賣れ行が多くなるといふ見込からである。本年は殊に毒の出来がよわかつた、華盛頓州あたりでは毒の栽培は日本人の手に殆んど歸してるといつてもよい。今年には日本人の毒成金がうよく出来たわけである。——しかし哀しいことには日本人はどぶろくを造る方法を心得てゐる。ひそかに濁酒を密造して酔ひを買つてゐた、ところが檢舉の手厳しく、日本人の罰せらるゝもの頻々、罰金も千圓や二千圓では濟まないの、折角毒で成金になつた者も、元の空阿彌になつたものがあるといふ。

ウ井スキーも亦禁酒してゐる州では一本二十五弗位に密賣されてゐるが、それでもアルコールを戀つてゐる者は二本三本を呑むといふ。

### 禁酒の第一日

體があまり冷つのでS君を促して宿へかへつた。

翌日私は紐育を立つたのである。停車場の前で、S君と夕飯を食つた、その時念の爲めビールはないかと聞いたら持つて來た。禁酒第一日にドウしたのかと聞くとビールは極めて淡い、アルコールを含む分量に依つて、これをアルコールと認むるや否やといふことが、未だ懸案になつてゐる。

賣るのは無論不可ないけれどもビールをアルコールと認むるといふ判決令が出ない限りは賣るつもりだ。判決で愈々不可ないといふ事になれば罰金を納めるばかり



だ——斯ういふ返事であつた。

しかし兎に角禁酒令は嚴として行はれた。いつまでアメリカが我慢し得るか、又今日の儘勵行し得るか。ゆるく左手黨は刮目して見てゐたい。

私は、ぶらりと紐育を出た。酒のないナイアガラ、シアトルへ向けた。

## さらば紐育

紐育なるS兄。

お別れしてから陽は直ぐ沈みかけた。紐育の場末ながら家々が競り合ひ軌み合つて聳え立つ夕空は、あかくと焼け爛れてゐた。河に沿ふて汽車はひた走りに走る。夕明りは猶川面に漂ふてゐた。

きらひな米國、肉も心も咬み取られ搾り取らるゝやうな紐育——私は健康を損ねたのは強ち氣候の所爲ばかりでなかつた。後から押されくゼンマイを掛けくされて歩かせられるやうな忙しいあわたしい街、何の滋味も心の糧もなく刹那々の刺戟にばかり心と體とを焦だませて来た日と日——想へば恐ろしい日を隣して来たが、斯うて無事に汽車に乗ることが出来たのは、全く兄の御心添が行き届いたものとして感謝しなければならぬ。

紐育の街は黄金が凄まじい勢ひで運動してゐた、煽風器前の塵のやうに金は舞踏してゐた。然し私には何の興味もない。土一升金一升、摩天閣街の高層建築物とても私には何の驚異もなかつた、寸分の地上に生き伸びんとして咬み合ひ閱ぎ合ひ押ひ合ひへし合ひしてゐる姿を、いたはしと觀たまでである。「世界」を見せびらかす紐育の總べてに飽きた。



川の流れ、森の蔭、暮れかゝる堤、郊外を走る車窓に倚りかゝつて私の心は俄かに和んで来た。黒人のボーイも親切であつた。日本人だと見ると黒ン坊は親切にすると誰から聞いたことを思ひ出した。「黒ン坊は現金だ」といふことも思ひ出した。みんな其通りであつた。私は人種問題の行く末をしづかに考へてみた、その中には新嘉坡から古倫母の間の船に見た印度人の群も加へた、梗概悲憤の面持をして私に接した埃及の一青年もあつた。――

紐育なるS兄。

ひろやかな汽車の床の上に私はしづかに横はつた。枕許に電燈が灯つたが直ぐ消して眠らうとした、硝子窓は二重になつてゐた、その厚い硝子を透して缺けかつた月の光がさしつてゐた。曠野の月の感じがした、日本のやうに潤んだ月、美しい星の夜は世界のどこにも求められないやうに思へた。望郷の念は湧然として――然し、いつの間にか私は眠り込んでゐた。

「ネキスト、バハロウ！」とボーイが注意してくれた。

### ナイアガラ瀑布より

紐育なるS兄。

バハロウの停車場に下りて、驛員からナイアガラ行の汽車が出るまで一時間ばかり余裕のあることを聞いた。一時預けに荷物を預けてゐるうちに、モ一つ便利な荷物の預けどころがあるのを發見した。そこには赤十字の徽章をつけた貴婦人らしいのが二三人澄まし込んでゐた。そして軍人の姿さへ見ると呼び込んで「ナイアガラに行くならば荷物をどうぞ預けて下さい」といつてゐた。「無料です」ともいつた。



彼女等も亦軍國主義熱にかされてゐるのである、兵隊さんでないと夜も日も明け  
ない人達である。

私は驛の食堂に入つて朝めしを食べた。蠅が多いのには驚いた、外國には蠅な  
かるないものだと思つてゐるが、フランスの田舎でも蠅に責められたし此處でも亦  
蠅に弱らせられた。殊にバハロウの蠅は大きくて唸るやうな勢を出して襲撃して  
くる。

漸く汽車に乗る。寫眞帳やらナイアガラ案内記を賣りにくる。

ナイアガラに着くと、同車の人が突然聲をかけて「誘惑されずに歩いてゆけ」と  
いつてくれた。私はホールまで歩いてゆくのだらうと思つたが、歩くといふことは  
死ぬより辛い私には勢ひ自動車の誘惑にこちらから進んで近よつた。二十五仙とい  
ふから安いものだ、乗合だらうと思つてゐると私一人乗せて走り出した。但し十分

間も走らぬうちにハタと止めて「四弗でどうです、全ナイアガラを見せる」といふ。  
こゝがホールなのだらう、もう瀧の落つる音やはけしい流れの音まで聞えてゐる。

イヤだといつて私は自動車から下りた、こんなことだつたら歩いて來たものと  
悔もした。

目の前に激流があつた。柳の並木が枝を垂れてゐる。早速柳のしづれ葉を近景に  
して激流をレンズに収めた。

女と男と腕を組んで、しづかに語りながら散歩してゐる幾組を見かける。青葉を  
踏んで霧の深い方へくとゆくとソコは瀧が落ちてゐるところで、霧ではない水煙  
りなのだ。とどろく豊富な水が落ちてゐる、瀧の幅がひろいので遠くの方は音が  
するばかりで瀧は見へない。

日がきら／＼とさす。虹が浮く。水煙に虹が消えたり浮いたりする。



瀧を横に虹根を張るや岩の角

電車で見物すべく切符を買ふ。橋を渡ると加奈陀なので、こゝで旅券を調べろのだ、私を一室に呼び込んでうるさい程聞く。しばらくすると三人連の日本人がやつて来た、此人達も亦旅券をしらべられてゐた。

「日本人だけと見へますね」と其一人がいふ。

「馬鹿にしてる」と皆つぶやく。黄色い顔をした私共だけで、白人達からは僅かの入国税をとるだけで、電車から下しもせずに通過させるのだ。私は電車から引をろされて此始末、三人の人連は自動車から下されて調べられたのである。

喧嘩しても仕方がないから又電車に乗る。加奈陀に入ると又役人が私の顔をちらちら見て入国許可證を見せると吐かす。

瀧を對岸に見つゝ電車は走る。大瀑布の場面は大きい、電車で随分走つてもまだ

瀧は眼前に落ちて雲を湧かせ霧を散らしてゐるのである。電車から下りて寫真をとる寫真機が霧でぬれる。

また電車で上流を見た。更に下流に下つて8兄——誰しもが見るケーブルカーなどのアメリカ式の大べらぼうなものを見る。急流に沿ふて更に下る山の中らしい感じがしてうれしかった。随分走つて又アメリカの方へ渡り急流を逆に今度は廻る。こゝいらが一番危なツかしさうで愉快で景氣がよい。しかし疲れた。

ひるめしはドコも満員、藥店の小僧に教へられて、とある小さなレストランの二階にあがる。女といふものは仕様のないもので、私の黄色い顔に對して明かに不快な色を示して、料理を運ぶにもつっけんどんである。癪に障るからチップをやるまいと思つたが襟度を見せてやれと思ひ返して逆にウントはづんでやつた。女は意外な返報に目を圓くして小さな聲で「サンキウ、サア」と言ひやつた。



もうナイガラも見たくないので町をひやかして歩く。エハガキ屋にも飽きて寶石商までひやかしてみよう。

また青草が戀しくホール近くまでゆく。寫真をとらうとすると、青年が傍へやつて来て指すから、其方を見ると、一匹の栗鼠が遊んでゐるのだ、木の實の落るのを喜んで食つてゐる、それを撮れといふから、私も面白いと思つてレンズを向けると栗鼠が逃げる、ちよろくと木の蔭にかくれたり枝を登つたりする。青年は面白がつて自分の食つてゐたパンを出しては栗鼠を誘ひ出す。

こんなことをして一時間ばかり、栗鼠を追ひまわしたが、とうとう一枚の印書すら得られず了ひ。まだ日は高し、バハロウに歸つたところで汽車まで時間がだいぶあるので、又瀧の方へゆく。

今度は瀧の水上の方を歩く。橋を渡つて中の島へ出る。木立が深い。木立を透し

て水の流れを撮影なんどする。島の突角、大瀑布と大瀑布との分れてゐるところへもゆく。鐵の柵をはなれると骨破微塵だ。

まだ時間がある。街をはなれた茶店を見つける。そこへ腰を下ろしてエハガキを誰彼へとかく。葉書をかきつゝ故郷の人々を夫れから夫れへと思ひ浮べるのも旅の楽しみである。

切手が自働的に出てくる。その代り五仙放り込んで四仙しか切手が出て来ない。その切手をべたべた貼る。アイスクリームをかちる。店のやちとブロークンを交へる。

S兄。おかけ様で迷ひ兒にならず再びバハロウに電車で引返して。そして汽車にうまく乗ることが出来ました。



修羅地獄の記

市俄古でも赤十字の婦人が活動してゐた。あすは獨立祭といふので町の中が何となくざわつく。

大阪商船の支店に伊庭氏と語る。「市俄古名物は矢張ストツクヤードですかね」といふ。見やうか見まいかと私も迷つた。アメリカ人でも見ないものがあるか聞いてゐる、然し戦争をするには此會社と妥協しないと肉の罐詰の供給に困るといふ位ださうな、國の戦ひが一會社の力でドウにでもなるといふべらほうな事實に興を覺えて、とにかく見物することにした。

「アメリカの第一印象は何です」と伊庭氏がたづねるから、私は遠慮なく「こんなイヤな國が榮えつことはない、アメリカはこれッきりだ。」といふ意味を語つた。「イヤでくししようがない。早くアメリカを逃げ出したいと思つて居ます」とも言つた。アメリカにゐる人は一種の恐米病に罹つてゐるものだが、伊庭氏は私のいふ事に賛成して私以上にアメリカを罵倒した、私は嬉しくつてしようがなかつた。ふたりは小半時間もアメリカの悪口を言つた。

そのうちに自働車が來たから目的地へ走らせる。市俄古の町は大湖に臨んでゐるがイヤな町だ、煤煙で眞黒い、貧民窟らしいところが見える。かなり汚い。

血腥い臭ひが風のまにまにブーンとしてくる。ハ、ア地獄が近くなつたなと思つてゐると、運轉手はモウ一哩だといふ、一哩の遠いところまで血の臭ひがしてくる地獄の臭ひが。

これから先をくたく書くのはイヤだ、私は胸を悪くする。



—豚の脚を引かけると器械に吊りあげられて悲鳴をあける。鋭利なナイフを持つた悪鬼が豚の咽喉をブツリと刺す、悲鳴と共に血が吹く。一頭を殺すのに三分とかゝらぬ、見てゐる間に悪鬼は十頭廿頭の豚の咽喉を抉る。

—もう、火で焙られて皮をむかれてゐる、肉はまだピク／＼動いてゐる、臓腑は血汐の中にまだ運動をつゞけてゐる。

—大根を料理するやうに脚、首、胴、股と切り分けられる。端から／＼何十頭の豚は見る間に肉片となり白骨となる。

—もう、肉は氷室で冷されてゐる、ハムになるのだ。もう肉は燻されてゐる。

—牛がゐる、屠所の牛は血の臭ひに首を垂れてゐる、器械が刻々に首の座に運んでくる。ハンマー一下、牛はへた／＼と倒れる。又一下、巨牛はへた／＼と倒れる。又々一下へた／＼と猛牛は倒れる、又一下——

—牛の皮は剥がれる。巨大な肉體は高く吊られてゐる、器械はどこまでも次から次へと肉塊を運ぶ。血の海だ、血の海だ。牛の體がくると大きなく／＼だんびらを持つた悪鬼はピカリと手を揮ふよと見るまに牛は眞二つになる。臓腑はどた／＼と血の海に落ちる。臓はまだ生きてゐる、牛の眼球が落ちる、眼球もまだ生きてゐる人を睨むかに血の海に浮いてゐる。

—夫れから夫れへと牛が殺される、見る間に巨大な肉體も細かくなつてゆく。大根を刻むやうに、薪を割るやうに。

—冷蔵庫、罐詰をこしらへてゐるところ、見てゐる間に何萬といふ牛の罐詰が出来る、罐詰ばかりぢやない、ブリツキから罐から拵へて肉を詰めるのだ。

—餘りの刺戟に頭がぼ／＼として了つた、體がけんなりした。

—悪鬼に見へた。働いてゐるものは獐猛な黒人や白人である。唇の反つに黒人が大



刀を振翳して牛をばつと割ると血をサツと頭から浴びる——まるで鬼だ。

黑白戦争——こゝだけでも市俄古には惨忍な人間が何萬人とゐるではないか。黑白戦争に血が伴ふのは當然の事だ、彼等は人間を殺すのも豚を殺すくらゐにしか考へてゐるまい。

女も働いてゐる。私が通るとぢろく／＼見ながら何か陰口を利いてゐた。多くの女どもも亦血の洗禮を受けてゐるのだ。

娯樂室といふものがある、安價な食堂がある。そんなものを私に自慢したとて、直ぐ感心するほど夫れほど私の頭は血に刷れてゐない。

待たせて置いたタクシーがゐないので探してゐると、アメリカの兵士が一人見物者が濟んだと見へて私の後からやつて來た。

聞くからタクシーを探してゐる、といつたら、日本人だらう、そこまで歩かうと

言ふ。そして

蝶々とまれよ菜の葉にトマレ——と變な調子で唱ふ。血の臭ひのするところ故郷の俗諺を聞く自分の姿を私は顧みた。

「西伯利に出征してゐた、そこで日本の兵士から教はつた」と云つて彼は二度も三度も私と歩く間唄つてゐた。

門を出るまでの兩側は明日の運命を知らぬけに何萬といふ牛や豚や羊が、柵の中で遊んでゐた。あついで日の下に。——

もう市俄古もイヤになつた。伊庭氏に夕飯の御馳走になつて世界第一といふデパートメントストアを見て。寄席に曲馬を見て夫れから又汽車の客となつた。



沙市雑記

横断鐵道の中にて

汽車の中の三日はたいした退屈もしなかつた。黒人のボーイは親切であつた（尤もチップが欲しかつたからであらう）夫れに私と同じ船で日本へゆくといふ夫人がゐた。神戸の夫のところ三年ゐたといつた。同じ室だつたので朝起きると「オハヨウ」と云ひ夜は「オヤスミ」と言つた。

この夫人も退屈さましに私の處へ来て箱根を説いたり日光を語つたりするから、御蔭様で野次馬に襲撃されなかつた。物見高いアメリカ人に言葉かけられてくたくと野次られてはやり切れぬ、夫人がゐる爲めに野次も近寄らなかつた。

茲に眼界際涯あれど砂漠は盡きず——そんな事を日記に書いた。禁酒令が實行されてゐるので酒のないのが淋しかつた。車中に散髪室がある、黒人がやつてゐる、汽車の中の散髪も面白からうとやつて貰ふ、風呂がある、これにも一寸はひつて見る。

沙市へ着く前夜であつた。寢ほけた目で見たのか、谷底に螢の群れてゐるやうな街の灯を見た。その美觀が頭にこびりついてゐる、汽車は七曲り八曲り、うねくろツキー山脈を下るのだから、その螢の群は右に見えたり左に見えたりした。いつものまにか私は昏々と眠つて、その街を汽車が過ぎたのを覺えなかつた。

日本街のなつかしさ

沙市の驛につくと日本人の赤帽がゐることから懐しかつた。ホテルにゆく途中で



日本人に會ふ、日本人街を通る、鮑で氷を削つてゐるのもなつかしかつた。漢字の看板もうれしかつた。日本の女を見るのもなつかしかつた、體につかぬ洋装であつても却つて興を覺えた。

この夜日本料理屋に飯を食べにゆく。給仕女は寫眞結婚で來たものゝみである。多く關西であるが中には小田原の生れもあつた。

日本人街を歩く。日本人が經營してゐるといふ活動寫眞も見る。

翌日から郵船支店の笠間氏の案内で沙市の諸方を見物した。ワシントン湖の明媚な風光を賞した、蕃薇に家を埋めてゐるやうな屋敷町も通つた、沙市にキャブテンが始めて上陸したといふ處にもいつた、海水浴場にもいつた、體の發育した婦人などが活潑に泳いでゐた。ワシントン大學にもいつて庭の池に咲いてゐる睡蓮の花をレンズに収めました。

運河も見にいつた。日本人がホテルに成功してゐる中にも宮川萬平氏が經營してゐる労働者相手のホテルを見にもいつた。

### 労働者のホテル

このホテルは四階建てで堂々たるものである。多くの労働者が煙草を吹かせてゐた。宮川氏は「この人達は家族を持たない人です、一生ホテル生活をする人達ですね、國々の人がゐます」といつた。老いた労働者もゐた。

宮川氏は案内しながらいつた。

「私は二十年許り前日本をえました。始めは布哇の移民でしたが面白くないので船に乗りました。こゝへ來てから二十年位になります。ホテルも随分失敗しましたが、戦争のおかげで近頃は絶えず満員です」



室を開けて見せてくれた。設備もなかくよく出来てゐた。一夜七十仙から一弗といつたが、私どもが宿つてゐる三弗五弗のホテルの設備に對して、さう遜色はない。室の数が四百四十あるといつた。

隣になつてゐる木賃ホテルにもいつてみた。一日二十仙位のところで二百數十人の浮浪人が收容される。下級労働者の爲めに設けてあるもので、病院の三等室のやうにベットが並べてある。シートも時々取替へてやつて、一日二十仙といへば、米國の生活の程度からいへば一日が日本の五錢位にしか當らないのだ。随分安いホテルである。

「こゝに宿るものは本當の浮浪人です。金がある間はかうして寢て暮らしてゐる。無くなると出稼ぎにいくといつた調子で、全く世間から捨てられた氣の毒な人達です」と宮川氏はいつた。そこいらには顔色の悪い浮浪者が毛布を被つて寢てゐた。

犬を買ひに

大北日報の竹内、山縣君等につれられて、自動車で犬を買ひにいつた。

倫敦で犬を買ひ得ず（送る困難もあつて）犬屋の飾り窓にいゝ犬を見て涎を流したものだ、いよく船に乗るから、一匹伴れてかへらうといふので黒人の犬の巡查に周旋方を頼んだのである。

巡查の友人の犬といふので教へられた家にゆくと一匹のコリイがある。随分いゝコリイであつたが、大形なので船へ連れ込むことを躊躇した。さアどうしやうかと迷つてゐるところへ、金切聲を出して飛び出したものがある。髪の毛がちりちりして男のやうになつてゐる肥つた黒人なのだ、女房なのだ、忽ち亭主に喰つてかゝつた。



「お前さん、この犬を賣るつもりなんだから、賣らうたつて私が賣らせはしない、私は訴へるから」私共の前で夫婦喧嘩を初めた。亭主は弱り切つて「なアに此人達は見に来たよけだよ」と辯解してゐたが女房は承知しなかつた。私どもは歸りかけてもまだ喧嘩してゐた。

いよく船が出るといふ前夜、私の室をノックするものがある。開けてやると黒人巡査が一匹の仔犬をもつて來たのだ。スパニールを見つけたから買へといふのだ、氣に入らなかつたが、わざ／＼探した來てくれたのだし、仕方がないから、先方のいふ値の半分で買つてやつた。

地下室へつないで置いて翌日船へつれていつた。航海中にボーイが世話をしてくれるので至極元氣だつたが、横濱へ着く二日前から俄かに暑くなつたためぐんなりして了つた。

東京へ連れて歸つて病院へ入れたが、とう／＼一週間目に死んで了つた。惜しいことをした。死骸は犬猫の墓地へ葬つて貰つた。愛犬シヤトルはとう／＼日本の土になつた。

寫眞結婚

沙市地方の日本人の發展はすばらしいものである。野菜市場、理髪店、洗濯業、ホテル業、運送業、いろ／＼やつてゐる皆相當に立派にしてゐる。加州方面のやうに白人とのいがみ合ひはないやうである。

今年は誠に苺が豊作で苺成金がだいぶ出來た。禁酒令の爲め苺を使ふ飲料水などが出來て、苺の需要が頓に増へたからださうな。

寫眞結婚は依然として流行してゐる。日本の女と見たら必らず夫があるものとし



なければならぬ、夫のない女は上陸を許さないから。

寫眞結婚の弊害や悲喜劇等も随分あるさうで、船の中でも誰にでも聞いた。何にしろ日本人の出産率は素破らしいものだ。掛日論者は理由の二に加へてゐるのを見てゐるのを見ても分る。彼等には寫眞で見合ひしたとだけ直ぐ結婚するといふ日本人の心理状態を不審に思ひ、愛のない結婚を平氣ですると批難してゐるが、その愛のない結婚が多くの子を生みアメリカ人の肝を冷つかせるから面白い。

五十近い男が三十代の寫眞を送つて婚約し、女はアメリカに来て見ると似顔どころか白髪の多い男だつたのに驚いた——位の話柄は随分にころがつてゐる。何にしても日本の女は「あきらめ」を一種の道徳と心得てゐるから寫眞結婚などが平氣で行はれるのだ。自分の期待してゐたこととは違つても「折角アメリカまで来て、諦めやう」と我慢して了ふ。それで落つくからおかしなものである。

「あきらめ」を道徳と心得てゐる日本には女は便利である。私は寫眞結婚に就ては機を得てくわしい記述をしたいとおもつてゐる。これは日本と米國との間につながる大きな問題である。

## 水葬の夜

世界一周の旅も終りに近づいて米國の北の港なる沙市を出で日本へ歸る途中の話である。私どもの乗つてゐる鹿島丸は平穩な航海をつづけてモウ五六日も経つた或る日の朝の事であつた。船室で話をしてゐると服装を改めた二人の日本人がいつて來た、名刺を見ると鹿兒島と愛知の人だつた、米國へ出稼ぎにいつての歸りらしかつた。「私どもは三等の者ですが氣の毒な人が出來ましたので御相談にあげまし



た」と云ふ。話を聞くと斯うである。

——静岡縣安部郡三保村三保松原の人で杉山ながしといふ五十三歳の老人がある、これが話の本人なのである。息子は船の給仕をしてゐたが脱走して米國へあがつたそして四五年稼いでゐるうちに相當に成功したものと見えて父を呼び寄せることにした、父は家財を賣つてはる／＼とアメリカへ渡るべく此鹿島丸に横濱から乗り込んだのである。

——いよく沙市へついた。さて上陸となると迎へに來てゐるべき筈の息子が來てゐない、アメリカの移民法といふのは極めてやかましい、引取人がない限りは上陸させないといふ、杉山老人はがっかりして了つた、鹿島丸でいよく送還されると定つたが鹿島丸だつて荷役その他で定期の出帆までには半月から碇泊してゐなければならぬ、其半月の間規則に依つて老人は移民局の收容所に生活しなければならぬ

ぬことになつた——

抑この收容所といふところが宛として地獄だ、三等船客にして若し十二支腸蟲などがあるど此處へ收容されるのだが其待遇たるや黒ン坊以下、とてもお話にならぬといふことである。男は男、女は女、と別の建物に收容されて起臥に看守があり出入は絶対に嚴禁される知合であつても男と女と聲を掛けることは出来ない——こんな窮屈な苦しいところに老人は半ヶ月收容されたのである。食費は無論移民局に取られて。

「ところが餘り氣落した所爲か日が経つ毎に物を食べなくなるとモウ食事をする氣力もないのですね、絶食してから二日になりますよ、私どもが出る暮ぢやないんですが同縣人といふのは此船に一人もゐないから近くの床にゐる私達が發起して金を集めました、といふのは懐も淋しからうから金でも上げたら元氣を出して



物を食べるだらうといふ考へなのです」鹿兒島の人は斯う私に話した。そして三等室だけで四十三圓ばかり集まつたと云つた。

私は即座にそこいらにゐる人に圖つたところがいろ／＼の意見が出た「氣の毒な人」といふ事から言へば三等ばかりではない、渡米する早々病氣になつて歸る人もゐる、又肺を病んで船内の病室に呻吟してゐる人もゐる、寄附を募つたら際限もないといふ説もあつた。

そこで私は私だけ心ばかりの金を無名で贈ることにして寄附は何れ折を見て食堂でも話さうといふことにして別れた。

「あの爺さんが、出帆する頃はよくデッキで見かけたぢやないか他人の子供も遊ばせてゐたよ」と面影を思ひ浮かべる人もあつた。

「氣落といふものはひどいものだね」と同情を寄る人もあつた。

その翌々日だつた。とう／＼爺さんは死んだ、とボーイが知らせて來た。死んだとなれば誰も文句はあらうやうはない、忽ち香典が集まつた、一二等だけで百數十圓集まつた、外人まで醜金した、傳道師が世話がよりで。

船の人から聞けばお爺さんは遺言したさうである。臨終まで金を枕許から離さなかつた、そしてボーイに向つて「金が少しあるからモシ死んだら静岡縣の田舎に兄弟がゐるから渡して貰ひたい」と頼んだといふ。船員は客と立會つて財布を調べる、と約三百圓ばかりの金を持つてゐた「家財を賣つた金なんでせう」とボーイは暗然としてゐた。

遺留品はシャツ、靴下に至るまで書出された、入港して届出る爲めである。事務員は俄に忙しくなつた、ボーイ等は船醫と共に臨終の頃人工呼吸をするやら死んでから頭髮を形見に剪りとるやらバタ／＼忙しかつた。



お爺さんの死んだところは百八十度の海上で、経度が新しくなるところ、船で言へば日が一日消える、即ち廿二日から一足飛びに廿四日になるところである。船中退屈したものは百八十度々々と戀女房の姿を待つやうに慕つたものだ、長い航海の半ば来たといふ安心も伴つて。

私は甲板を歩き乍ら青潮に對して感慨に耽つた。お爺さんは金を持つてゐたのだ。金を持つてゐたが氣落がひどかつた、食事をしなくなつたのは金のあるなしではなかつた、アメリカまでいつて息子に會へず淋しい郷里（家財まで賣つた）に歸らねばならぬといふ哀しみと苦しみに心を苛なまれたのであつた——

いよく死んだ翌日の夜、水葬するといふことになつた。霧は海を蔽ふてその日は朝から甲板は霧に濡れてゐた。

船長に日本人船客として希望を申し出た。普通ならば海中に投じて死體の廻りを

三度船が廻轉するのであるが急ぐ航海であるから夫れまでは望まない、しかし船は一時停めて貰ひたい——聞かれるか肯かれぬかは別として兎に角申し出た。

夜になると霧は愈々深くなつて来た、午後九時——私は外套を着て甲部甲板に出ると霧は雨のやうに頬に雫する。船員一同は整列したその後日本人は並んだ外人も見てゐた、女たちは上甲板から見下してゐた。

水夫に依つて死體が昇ぎ出された、足部に五十貫目の鐵の重石を入れ全體を日の丸の旗で巻いてある、その上に更に日の丸の新しい旗で蔽うてある、死骸を載せる臺も斜に海中に突出されてある、今三保松原を放れてアメリカへいつた老人が、アメリカの土を踏む事なしに日本へ歸る途中、経度が新たになるといふ百八十度近くの海上で水葬をされるのである。霧が降る、涙の雨のやうに霧が降つてゐる——事務長が弔辭を讀んだ。「太平洋上波靜かなるところ——」と讀んだ、全く霧がある位



波は静かであつた。「ストップ」と機關部へ號令をかけた者がある、船は一瞬時機關の音を斷つたが船の惰力でもまだ動いてゐた。

ドブーン——日の丸の旗にくるまつた死體が海中に迂り落されてから暫くしてから此音をきいたのである、

船客は皆かなしい顔をして霧の中を室々に歸つた。

翌日波が静かだのに水夫が一名落込んだまゝ行方不明にたつた、船は一時間餘も波の上を搜したが帽子を拾つたのみで死體は分らなかつた。

その翌日は火夫が石炭船の中に落ち込んで重傷を負ひ横濱へ入港の前日死んで了つた。

恰度三保のお爺さんから三人の不祥事があつたわけである。水葬の夜の印象は猶去りがての茲に思ひ出づるまゝを書いた。

### 兩替物語

三月も末だつた。上海にあがると外套なしでは寒かつた。私は南へ〜とゆくからといつて門司で外套を妻に持たせてかへしたので、親戚のI氏の家で外套を借りた、袖が短いので洋服がハミ出た、それを着て私は同船の三人と南京へゆくことにした。

うすぐらい日本旅館の一室で南京行の旅費の兩替をした時に、つくづく金の行く方のあはれさが感ぜられた。五弗、十弗と書いた紙幣は半巾を半分に折つたほど大きくて、支那人が計算する時に記したのか、艶のいゝ墨色で驚くべき多額の金の高がかいてあつたり、質造に非らざることを證する爲めか、商人の印やらサインがし



であるなど、ちぎれかゝつて居る紙幣の上に、さまざまの過去を見出すことが出来た。

アメリカにゆけば、日本の金が半分になることは聞いてゐたが馬鹿にしてかゝつてゐる支那に來ても日本の金が殆んど半分に減るといふことが心細かつた。先の長い旅に懐中の金が、どう消えてゆくかといふことが、しみじみと心もとなく思はれた。

初めて海外の旅に出て先づ金といふことゝ國といふことが考へられたのは、思ひも寄らぬ出来事だつた。

「こゝで、五六十圓使ふには百圓失くなるから遣り切れない、それに其ノートではちつとも有難味がないね」と、油くさい汽車の中で、友は古ほけた紙幣の端をそつと摘み上げては次の紙幣の顔を覗いた。

午前と午後と相場が立つて銀の値の高下は甚しかった、私は胸のうちで其日兩替した相場を算へてみた。

### 香港の相場

香港では又金が變つた。しかし相場は矢張大同小異で、依然として日本の金は減つてゆく。

煙草を買ふ時に、イギリス人がボーイを走らせて兩替してくれた。私どもは煙草を買ふにも繪葉書を買ふにも、胸の裡で一度日本の金に換算してみないと、高いか安いか分らなかつた。

「……すると幾らになるかね」と、友だち同志聞いた値段を日本の金に割返して見た。



五弗で買ふ翡翠は七圓五十錢、十弗で買ふ運動靴は十五圓といふやうに、一度懐の金に戻してみないと、日本より高いか安いかわかぬ見當さへつかなくかつた。船にかへると晩めしの割前だとか自働車代とか、いち／＼日本貨に換算して割當る面倒があつた。みんな、金の面倒なことにそろ／＼頭を悩ましてきた。そして使ひ残りのないやうに、兩替したゞけの金を使ひ切ることも亦心にかけてねばならぬ大切な事だつた。上海の金を香港の金に換へてゆくには、又幾分か相場鞘だけ損をしなければならぬ、香港から新嘉坡、新嘉坡からコロンボといふやうに、港から港へと漂つゆく旅人は、金の心づかひが大變である。使ひのこりの金は必らず減るやうに兩替されるから。

黒ん坊の兩替屋

「モノー、チエンジ——チエンジ、モノー」と甲板に聲がする。そしてチャラ／＼と金をゆすぶる音がする、船室から出てみるとモウ黒ん坊の兩替屋が來てゐるのであつた。船が新嘉坡に近づくと一番に見えるのが海中に落した金を拾ふ土人の船で棧橋につくと一番にくるのが兩替屋であつた。ボケットの金を掴んでは落し掴んで落して音をさせるので、朝鮮人が飴を賣るのに鉄を鳴らしたり、定齊屋が荷をカタ／＼いさせて人の注意を惹くやうなものである。

血を吸つたやうな赤い厚い唇を外らして、更紗やら赤いネルやら腰に巻いてゐる黒ん坊が、入替り立替り銅貨や銀貨をチャラつかせてはくるのも旅の興であつた。日本を出た旅人は、又こゝでも日本の金を減らした。使ひのこした金は英貨やら又はコロンボの金に換へられて、その上に又減つていつた。



老ひたる手相見

彼南は目がくらくくする程暑い、二時間ばかり新嘉坡を歩いたら、手の甲が焦けついて黒くなつたので、一圓で手袋を買つた。その手袋を取出して甲板に出ると彼南の市街が日光の直射下に燃え光つてゐる。

こゝでも手袋の上にあつた日本の金が減つて、代りに土地の金が汗に塗れて掌に乗せられた。

手相を観る土人が二人船に來た。

日本の金でいゝといふので、客は争ふて見てもらつた。

外國語學校のメドレー教授の手相を見て、タゴールのやうな目をした易者はプロヘエツサーだと職業を中てた。メドレー氏はびつくりした。西洋の婦人は皆過去を

當てられて青い目を刮つてゐた。露西亞の夫婦者がゐるが、夫人の方は二年の間に必らず水死すると言はれて、仰山な哀しい表情をした。私も日本の一圓紙幣を出した。日本の紙幣が其ま、受取られるといふことが嬉しかつた。

「ヂス、ライン！」と老易者は私の手の筋を指した。私は椅子にかけて大きな掌を日光に向けてゐる、彼は踊んで鋭い目で掌を見ては私の顔を仰ぐ。

汝はこれまで金を欲がつた、然し得られなかつたらうと彼はいつた。私だつて金が欲くないことはない、得られなかつたことは歴然たる事實であるからイエスと答へた。

「ヂス、ライン」と易者は又手筋を指した。こみ入つたことになると聾に近い私に英語の分るべくもない。



二三人の客が面白半分おもしろはんぶんに私の大きな掌てのひらを取巻とりまいてくれた。

「大きい手だのう」と誰か言った。全く私の手は大きい、三越さんせつでも白木屋しろきやでも銀座ぎんざのどこの雑貨店ざつくわてんでも、私の手を包み得る革の手袋てぶくろがなかった。

「ヂス、ライン」と易者えきしやがペラ／＼をやり出した。汝なんぢは二三年にんねんの間に職業しよくふかを代へなければならぬぞ、さうすると金が得られる——といつて私の顔色かほいろを窺うかがつた。職業しよくふかを代るといふことも金が得られるといふことも未来みらいのことであり又そんな豫覺よかくはちつともないからふんんと笑つてゐた。

汝なんぢは六人の子を得る、そのうち双生兒ふたごが出来るといつた、私は苦笑くせうした、みんなは「これは秀逸しゆいつだ」と哄笑こうせうした。

汝なんぢの船ふねがついたところに、汝なんぢを待つてゐる電報でんぱうがあるると彼は追かけて言った。未来みらいを占ふに電報でんぱうとまで具體的ぐたいてきに示す彼の眼の光あかりに私は驚歎きやうたんした。遠い未来みらいなら兎えに

角倫敦かくろんとんに此船このふねはつくのである。そして此船このふねは引返して又此港このみなとで彼に會ふであらう。私わたしはるないでも船ふねの人がある。それに彼は堅く信ずるものゝやうに言ひ放つた。そして「ドウだ、中つたらう」といふ顔つきをしてから窺うかがひあげた。

私の心の裡うちはヒヤリとした。實は倫敦ろんとんへつけば正金の支店しでんに下關しもせきから電報でんぱう爲替かへがくることになつてゐるのである。——これは參つたと思つたが一寸不安ふあんな氣持きもちもしたのは萬一家族まんかぞくに何等かの異變いへんがあつて電報でんぱうがくるのではあるまいかといふ疑念ぎねんである。ソコで顔色かほいろに出ぬやうに氣を押へつけて「吉事きつじか凶事きようじか」と聞いた。

「ベリ、グード」と彼は言ひ放つてニヤリと笑つた。私の懐中都合ふせこうごふまで占ひ知つてゐるやうに見えて私はぞつとした。

とにかく、この手相見てさうみの老入らうじんに渡した日本にほんの一圓紙幣いちげんきは、私にとつて興味きやうみのあることだつた。彼は何れ土地ちちの金と兩替りやうがへをするのであらうが、故郷こきやうの金が其まゝ通用つうよう



したといふこに私の心は安らいだ。

寶石の光に消ゆる金

また長い船路を辿つてセイロン島のコロンボについた。

日曜なので船まで兩替屋は來ない、郵便も電信も汽車も休みであつた。税關の波止場で兩替した。ルビーの相場は安かつた、六十二錢だつた、日本の金が俄かに高くなつたやうな氣がした。

釋迦の齒が埋つてゐるキャンデーに自働車でいつた。山上で午めしを食つた、波止場で酒を飲んだ。あくる日また上陸するとモウこゝの金は幾らも残つてゐない。

「ニッポンの金よろしい」と黒ン坊がいふ、ハシムといふ波止場のすぐ近くにゐる寶石屋で、日本人には特に一割引くといふので、船の客で一ぱいだつた。一船

はいると三千圓は商賣しますと黒い番頭がいつた。私は八箇國の言葉を使ふ、日本人のたいてい買ひますともいつた、宮殿下の御買上げ、その他この港を來往した人の名刺に此商店の信用される意味のことが書いてあつた。

「此寶石屋は安くはなし但し高くもなし要するにガラスをつかます事なし」

「日本に好意を有する商人なるが故によく買つてやり給へ」

斯ういふやうな文字が多い名刺の間に見られた新嘉坡からコロンボの船の中でデツキ船客の黒いのからいかゞはしい寶石を高く賣つけられた人々は渴いたやうに寶石を漁り出した、私も其ひとりだつた。

寶石を雜穀屋の店先のやうに出して、人の手にするに任かせた。少しも危惧の念を抱かず、日本人の選ぶにまかせるといふ態度が先づ嬉しかつた。一石出しては一石綿にしまひ込むといふやうな不安がるケチな日本商人の氣ごゝろとはまるで違つ



てるることが嬉しかった。

光線があたれば星の線が浮き出るスタールビー、桃色、深紅色のルビー、さては印度洋の真唯中の深海を想はするヴリユウサファイヤ、その他アレキサンドリヤ、何々、何々、ムーンストーンの安いのに至るまでどれも私を目を魅惑する光と色とをもつてゐた。光線で猫の目のやうに變る寶石もあつた、ダイヤモンドもあつた、何萬箇といふ寶石は一顆一顆汗の泌む目に強い刺戟を與へた。

寶石を船にもつてかへつて、みんな品さだめに一夜も費した。そのうちに船が動き出した。

私の懐中には正金の信用状と日本紙幣が五百圓あつたが、すでに五百圓の紙幣の影が薄くなつたのを淋しくおもつた。そして鑿口の中には上海、香港、新嘉坡の使ひ残りの銀貨やら銅貨があるばかりであつた。お土産に此金をやらうと思つて兩替

せずに放り込んでおいたが、次第に多くなつて鑿口の腹が張り切るやうになつた、それにコロンの穴の開いた白銅が加へられた。

### ポートサイドの兩替

いよく日本の金の力が無くなつてしまつた。ながいく暑いく旅を日に日に繼いで印度洋から紅海、蘇士の運河を通つて世界のあふれものが集つてゐるといふ坡西土の港に着いてからは一入淋しい氣持が濃くなつた。

この港には二人の日本人がある。Nといつて七八年この土地にゐる間に伊太利人を妻にして今は立派な店を出してゐる、その弟といふ人もゐた。日本人が一人でも斯うしてゐるといふ事は、幾ら旅人の心を休めることであらう。徳富健次郎氏のトランクもあつた、預けて旅に出てゐるのであらう。七八年行方不明になつてゐるY



のカバンも未だのこしてあつた。  
 埃及の反亂で人の氣は殺伐である、一青年は私を捉へて埃及の獨立すべからざる所以を聞いてくれといつた、私は夫れを聞くだけの言葉を知らず又時間のないことも淋しかつた。

信用状の金を引出すべき銀行へいつた。フランスの銀行であつた。佛貨は安いと聞いてゐたのに此銀行は自國の金であるから高く賣らうとした。仕方がないから引出す金の半分を英貨半分を佛貨にして貰つた。しばらくは入りさうもない五十法紙幣が何枚か、私の紙入をふくらせた。

結局、信用状から引出した金は幾らか減つたことになつた。

### イギリスの金

また長い旅の日をついだ。船はアフリカの大陸近く進む。浮流水雷の懸念もあつたのか、伊太利の翠巒を遠く去つて、たゞちよい／＼島を見てゆく位だつた。デブラルタルの海峡に嶮崖の要塞を仰いでから、船は大西洋に出た、大西洋の横波は船をゆすつた。

涯しないやうに思はれた船旅もとうとうテムス河を遡つて倫敦まぢかくなつて終つた。夜の十二時頃倫敦の北のステーションに下された。

あくる日、正金銀行にゆくと、果して彼南の手相見が豫言したやうに電報爲替がとゞいてゐた。この爲替でみると、バウンドの相場が安く、下關の正金で一磅を九圓六十錢ばかりに買つてあるらしかつた。

「日本の金は今は高いです」——トーマス、クツクの兩替をする窓で聞かされたときには、初めて日本といふ國の力を感じた。フランスの金は安かつた。國債を募



つてゐるからであらうか、毎日のやうに相場が下つた。

「今一萬圓あると儲かるね、旅費位たゞ浮くだらう」と日本人は言ひ言ひした。フランスの金は英貨一磅が二十七法に替へられた、安いどん底には三十一法であつた、長く大陸を旅する人はモット下つたら買つて一箇月や二箇月分の費用を儲けやうと企てる人もあつた、そんな思惑をしてゐる間に金は又動いて上つたりした。忙がしい私の旅は陸にゐる日が短いだけに紙幣の顔を見馴れないうちに又他國の紙幣を買はねばならなかつた。旅のあわたしい氣持は一磅の紙幣が五圓札のやうな氣がしたり一志の銀貨が二十錢銀貨のやうに思へたりした。英國の銅貨一片が約四錢に當ることを考へないで日本の銅貨のつもりでチップをやり過ぎたりした。

「銅貨だつて白銅の値があるよ」と長くゐる日本人は銅貨を粗末にしないやうに注意してくれた。

英國の貨幣法のわづらはしきにはほとく弱つた。小面倒な貨幣がいろいろに造られてゐる。商品の値段でも日本でいふ二分とか一兩二分といつたやうな、古めいた通語があつて、よく夫れに悩まされた。一ギニーとし云へば一磅一志であるといふことまで覺えなければならなかつた。

### フランスの金

フランスは五法の紙幣がある。英貨四志の銀貨にも相當しない位安い、何かといへば此紙幣がチップに投げ出された。百法の紙幣はお土産に持つてかへりたい位美しい美術的のもので、百法といふ聲は非常な額を聯想させるけれど、相場から云へば三十圓餘りのものである。金の値打が下落するといふことは旅人にいろいろの事を考へさせる。



全くフランスに行くに紙入が札で膨れあがる程安く買へるが、それを使ふときには、けつそり紙入が瘠るほど物が高く且つ金の足は軽い。

白葡萄酒で舌を喜ばせるには三十法をださねばならぬ、蛙の料理に舌鼓を打つには四五十法を拂はねばならぬ、藝術の匂ひの高い本——重くて抱へ切れないやうな書の本などが二十法見當、サロンに使ふモデルの全部を蒐めて千姿萬態の姿をさせた本などが二十五法位で買へることを思へば、食へるといふこと呑むといふことは随分高いものに考がへられた。

小切手と信用状の影

私の船は英國の西海岸を出て米國へ向つてモウ八日ばかりかの航海をつづけてゐる私の靴の中には米貨に換算された小切手と影の薄くなつた信用状と、その使ひの

こりしかない。米貨を少し買ったが二十弗も五弗も同じ大きさの同じ色の横に長い紙幣をくれた。米貨は高いので小切手の額も著しく減つた。わかり切つたことであるが、半分近くの数字になるといふことは心淋しいもので、經濟、貨幣法、そんな學問を知らぬものにとつては、假令同じ質の金であつても数字の減るといふことは淋しまれた。

紐育へついたら、又どんな金の憂き目をみることであらう。小切手は萬一の用意にといつて、同じものを二通くれた。一通は紙入、一通はトランクに藏つておけば、どちらかど失くなつても、一通あれば拂つてくれるさうである。——さうまでして持つてゆかなければならぬほどの大金ではないから、二通ともいつしよに靴に入れてあるが、二通持つ——といふことも己に旅のこゝろを深くするものだ。波にゆられ揺られて大西洋を越ゆる淋しさに一入の淋しみを添へて。(一九・六・一五・セレベ



ス丸まるにて

四月某日將發香港

雨江加福力

關山遙憶百花紅 南粵轉驚梅雨濛 四月舟人齊衣白 孤帆直入火雲中

香港雨中夜歸

竹輿戴醉夢溫柔 天半雲梯斷續抽 樓閣高低三十六 星然燈火帶烟幽

星坡黑奴

萬竿椰子半江灣 一雨涼風酤酒還 赤裸生涯塵不染 綠陰高架屋三間



巴里酒壚

常酒繁華廿二時 滿城紛黛夜歸遲 獨憑紫陌香風榻 一盞葡萄賦竹枝

古戰場

迅雷劫火剩溝坑 塵盡東西幾萬兵 蝸牛龍頭春色冷 無名野草壓功名

世界のぞ記終

大正八年十一月十日印刷  
大正八年十二月二日發行

正金一圓五十錢

著者 小野賢一郎

東京市神田區鍛冶町七番地

發行者 高谷寬三郎

東京市京橋區築地二丁目三十番地

印刷者 川崎佐吉

不許複製

世界のぞの記附

發兌

東京市神田區鍛冶町  
電話神田一三二番  
振替東京四九七八番

正報社

印刷所 川崎活版所



384
126

11.1.12



終

